クンタオ（拳道）西祥郎著

目次

1. クンタオ(拳道)....3
2. 拳豪小説....4
3. ジャワに渡った拳豪....6
4. ベー・カンビン....8
5. 盗賊団を撃滅....11
6. 暴走馬車....13
7. レシデン閣下が賞賛....14
8. ｸﾄﾞｩｽのタイジン....16
9. 救いの神現る....18
10. ロー・ジンテイ....20
11. 殺人事件....22
12. 南洋へ....24
13. アンバラワに落ち着く....26
14. 酔っぱらい兵士とのいざこざ....28
15. 復讐の闇討ち....30
16. 両雄相識る....32
17. 悪徳金持ち....34
18. 手品の術....35
19. 行動開始....37
20. 第一の警告....39
21. 第二の警告....41
22. 犯人に犯人を捜させる....43
23. 人助け....45
24. クンチュン、アンバラワへ....47
25. 説諭されるクンチュン....49
26. クンチュン強盗に襲われる....51
27. ウォノソボに移住....53
28. パラカンに引っ越す....55
29. 弟子の活躍....57
30. ジンティの博物館....58
31. ロー・バンテン....60
32. 師との出会い....62
33. 人は見かけによらない....64

34. 五祖拳の奥義 66
35. ジャワ島に向かう 68
36. 緑鼻のバロンサイ 70
37. ジャカルタで永眠 72

「クンタオ（１）」（2023年11月20日）

中国拳法を指す言葉としてインドネシアでは昔から、kung hu 功夫という言葉よりも kung tao 拳道のほうがよく使われてきたように感じられる。功夫というのは日本人におなじみのカンフーのことだ。漢字の国である日本のインターネット国語辞典を調べると、カンフーの意味を表す功夫という言葉は採録されているのだが、拳道という二文字の漢字熟語は出て来ない。もちろん中国語の単語がすべて日本語にならなければならないほどの文化宗主国関係ではないのだから、それを問題視しなければならないほどのことでもあるまい。今や時代は変わってしまっているのだ。

ご本家の中国で、中国拳法の使い手たちの姿やその生涯はさまざまな物語の中に描かれてきた。インドネシアという異郷においても、その種の血沸き肉躍る物語は古くから現地在住の華人系プラナカンの間で人気を博していた。その環境の中で連綿と伝えられてきたのとはまた別に、cerita silat とインドネシアのプリブミが呼んだ中華式拳豪冒険物語は地元民の間に膨大なファンの層を作り出したのである。

１930年代には、ムラユ語で書かれたジャワ島を舞台にする中国人拳士の物語が発表されている。それは中国語を使わない（理解しない）プラナカン層の激増という現象に歩を合わせたものだったように見える。

ここで言っている中国語とは中国語文のことであって中国語単語の意味ではない。拳道は中国文化の中に興ったものであるためさまざまな中国語の単語や熟語がその術語として使われた。kung tao という言葉自体からして華語単語なのであり、ムラユ語の小説にそれが常に ilmu silat と翻訳されたわけでもなく、kung tao や kungthao などの語を諸作家はムラユ語作品の中にたくさん使っている。

ヌサンタラ在住華人社会では19世紀半ばごろまで、中華文化コミュニティの中で文筆活動を行なうひとびとは華語やオランダ語をメインに使って著述していた。ところが19世紀後半の半ばを過ぎるころにはムラユ語で著作する華人が激増した。後にパサルムラユ語と名付けられた非ムラユ語母語者たちのリンガフランカが多くの華人プラナカン文筆家のペンを動かすようになったのである。

ムラユ文化の源流地域だったスマトラ島中南部からマラヤ半島そしてボルネオ島西部にかけてのエリア

でよりも、その外側にある非ムラユ語文化圏でその現象が起こったことはたいへん興味深いものがある。この分野の文学は Kesasteraan Melayu Tionghoa というジャンル名称を与えられて今でも研究が続けられている。

ほぼ百年に渡って時代を風靡した中華ムラユ文学は806人の中華系プラナカン文学者が3千5編の作品を生み出したとされている。1918年から1967年までのほぼ50年間に勃興したインドネシア現代文学は175人の作家がおよそ4百の作品を生み出しただけに終わったことをテーウ博士が記している。さらにその期間を1979年まで伸ばしてみても、287人の作家による770作品というのが現代インドネシア文学初期の実力だったのである。華人プラナカンの生産性の高さは文学の中にすら投影されていると言うことができそうだ。

拙作「チクンバンのバラの花」< http://indojoho.ciao.jp/koreg/libroos.html >や

「小説クラカタウ」< http://indojoho.ciao.jp/archives/library013.html >

「ロー・フェンクイ」< http://indojoho.ciao.jp/koreg/libkoei.html >

あるいは「黄家の人々」< http://omdoyok.web.fc2.com/Kawan/Kawan-NishiShourou/73Asian-in-Nusantara.pdf >(「ヌサンタラのアジア人たち」の後半にあります)などはその中華ムラユ文学から採りあげられたものだ。[続く]

「クンタオ(2)」(2023年11月21日)

日本軍による占領時代が終わったあと、ヌサンタラの中華社会で華字新聞がいろいろと発行された。中国本土で始まった共産党と国民党の対立抗争の時代を反映して、そのどちらかを支持して毛沢東派と蒋介石派にインドネシアの中華系メディア界も二分されたが、どちらの派も拳豪冒険小説を好評連載した。

インドネシアで起こった PRRI/Permesta 反乱を台湾が支援したことから、スカルノ政権は台湾と関りを持

つ華字新聞を発禁処分にした。そのころ高い人気を誇った拳豪冒険小説に、Jenghu San Nuxie や Samhwa Nuxie がある。それらはインドネシア語に翻訳されて本になり、十数回も版を重ねることになった。

華人はまたインドネシア語の新聞雑誌も発行した。代表的なものに Keng Po 競報, Sin Po 新報, Star Weekly 明星周刊, Pantjawarna などがあり、いずれもがチュリタシラッ(拳豪冒険小説)を連載したからプリブミ読者層からたいへんな人気を集め、連載小説は続々と一冊の書籍にまとめられて刊行された。1960年代ごろまで、ケンポ―とシンポ―はインドネシアの新聞業界で最大の発行部数を誇っていた。

その後インドネシアで最大規模の発行部数を持つ全国紙に育ったコンパスは1965年6月28日に誕生し、3カ月後に起こった一大国家政変の嵐を乗り越えて国民の良識を語る不偏不党のマスメディアを目指す道を邁進した。

Achmad Yani 将軍

極度に左傾化した国内政治情勢の均衡回復を求めていた国軍総司令官アッマッ・ヤニ将軍が政治イデオロギー対立のもっと深部にある人間性を呼び覚ますための新聞発行をカトリック教徒のフランス・セダ農園相にアドバイスしたのがコンパス紙の発端であり、大臣は自分の親しいメディア業界者 P.K.Ojong と Jakob Oetama にこの話を持ちかけてコンパス紙を誕生させた。

ペトルス・カニシウス・オヨンは歐陽　炳坤(Auw Jong Peng-Koen)の中国名を持つプラナカンでそれまでスターウイークリーの編集長を務めていた。ヤコブ・ウタマはカトリック教団が発行する週刊誌 Penabur の記者だった。オヨンは大臣の話を即座に了承し、ヤコブを初代編集長に任じて新聞発行準備に取り掛かったのである。

Jakob Oetama

１960年代に激しくなったインドネシアの左傾化は国民生活にまで干渉の網を広げて、拳豪冒険小説は反革命的であるという烙印を捺すようになった。その時代に反革命的という言葉は反国家社会や非国民といった意味で使われ、国民に著しい恐怖をもたらす言葉になっていた。作家も読者も出版社もその恐怖から遠ざかろうとしためにブームはおのずと下火になる道をたどった。

G30S政変が一段落すると、チュリタシラッは不死鳥のように復活した。ポケットサイズで印刷された薄いページ数のシリーズはたいてい20から60回くらいの分冊で作られ、中には70回などという長いシリーズになるものもあった。全分冊を通して積み重ねると1メートルを超えるようなものまで出現したのである。

出版社はそのような分冊を毎月１～２冊から４～５冊くらい発行し、１年かけて完読するようなスタイルを執っていた。発行部数は各分冊が１万から１万５千くらいだったそうだ。いまでもそれらのシリーズ小説を新聞雑誌売場や貸本屋あるいは古本屋で目にすることができる。

香港や台湾のアクション映画ブームが始まると、書物と映画が相互に影響し合ってインドネシア庶民のエンタメ分野の中にチュリタシラッはしっかりと根を下ろした。[続く]

「クンタオ（３）」（2023年11月22日）

１980年代になると中国語の拳豪冒険小説をたくさんの出版社がインドネシア語に翻訳して発行した。Pang Coan Thian Lie や67冊のシリーズになった Sia Thiauw Eng Hiang、あるいは Sin Tiauw Hiap Lu、To Liong To などが代表的なヒット作品だ。

大勢の読者が物語の中に挿入された中国語を覚えて日常生活の中で使うようになった。

suhu　guru dalam dunia persilatan

suheng　saudara seperguruan

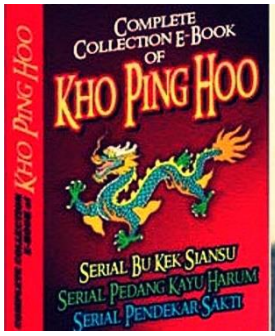
sumoy　saudara perempuan seperguruan

lwekang　tenaga dalam

kangouw　persilatan

piebu　pertandingan

インドネシア人プリブミのチュリタシラッ愛読者たちはほとんどだれもが、中国で有力な拳道流派は Shao Lin Sie 少林寺と Bu Tong Pai 武当派であることをよく知っていた。



インドネシアで、チュリタシラッ作家として最大級の英名を馳せたのが1994年7月に急逝した Kho Ping Hoo 許平和だ。1926年8月17日に中部ジャワ州スラゲンでプラナカン家庭に生まれたかれは30年間に120のフィクション小説作品を世に送った。かれは中国語の読み書きがまったくできなかったそうだ。アスマラマン・スコワティというインドネシア名を持つコー・ピンホーは香港や台湾のアクション映画から小説のヒントをいろいろ得たと言われている。かれの愛読者は160万人に達するという説もある。

インドネシア人プリブミが中国文化を題材にしたチュリタシラッを好むのはどうしてか？歴史家でジャーナリストのアルウィ・シャハブ氏の分析によれば、チュリタシラッの多くは歴史を盛り込んで物語られていることに加えて、人生哲学が語られ、さらに男女の愛と武闘が描かれている点にある。正義と悪が闘い、最後に必ず正義が勝利を得るのである。おまけに読者は作者が描く舞台の中に思いを馳せ、心を酔わせたままファンタジーの中に吸い込まれて溶け込んで行くのだ。

中国で拳道を身に着けたひとびとが昔からたくさん南洋にやってきた。南洋華僑という言葉で括られている東南アジアへの華人渡海者の中に、この特殊技術のマスターたちも混じっていたのである。ジャワ島にやってきてその地の土になった拳豪も少なからずいる。かれらの多くは華人コミュニティの中で生涯を終えた

が、かれらの作った拳道武館は時代を経てプリブミのイルムシラッと溶け合い、独自なものへと発展した。

クンタオの達人たちは武闘医術の知識と実践がなしには済まなかった。打ち身・捻挫・骨折といった怪我の治療は、武闘の中での筋骨・血管・呼吸器などの応用と共に、道を極めるための必須知識になった。その知識を道の外にいるひとびとに使えばいっぱしの医者になれるのである。こうして拳豪たちの多くが拳道武館の師匠と中国医という二足のわらじを履く人生を送った。ジャワ島に名を残した華人拳豪のほとんどは、プリブミの中のイルムシラッに興味を持たないひとびとにとっての有能なシンセ(sinse/sinshe 先生＝中国医)だったのである。

19世紀後半の時代にスマランに住んでいた拳豪のひとりに、Be Kang Pien という人物がいる。スマランの華人コミュニティを統率していたマヨールチナの Be Biauw Tjoan が行っていたアヘン商売の用心棒の仕事をしていた。[続く]

「クンタオ（4）」(2023年11月23日)

Be Biauw Tjoan 馬淼泉

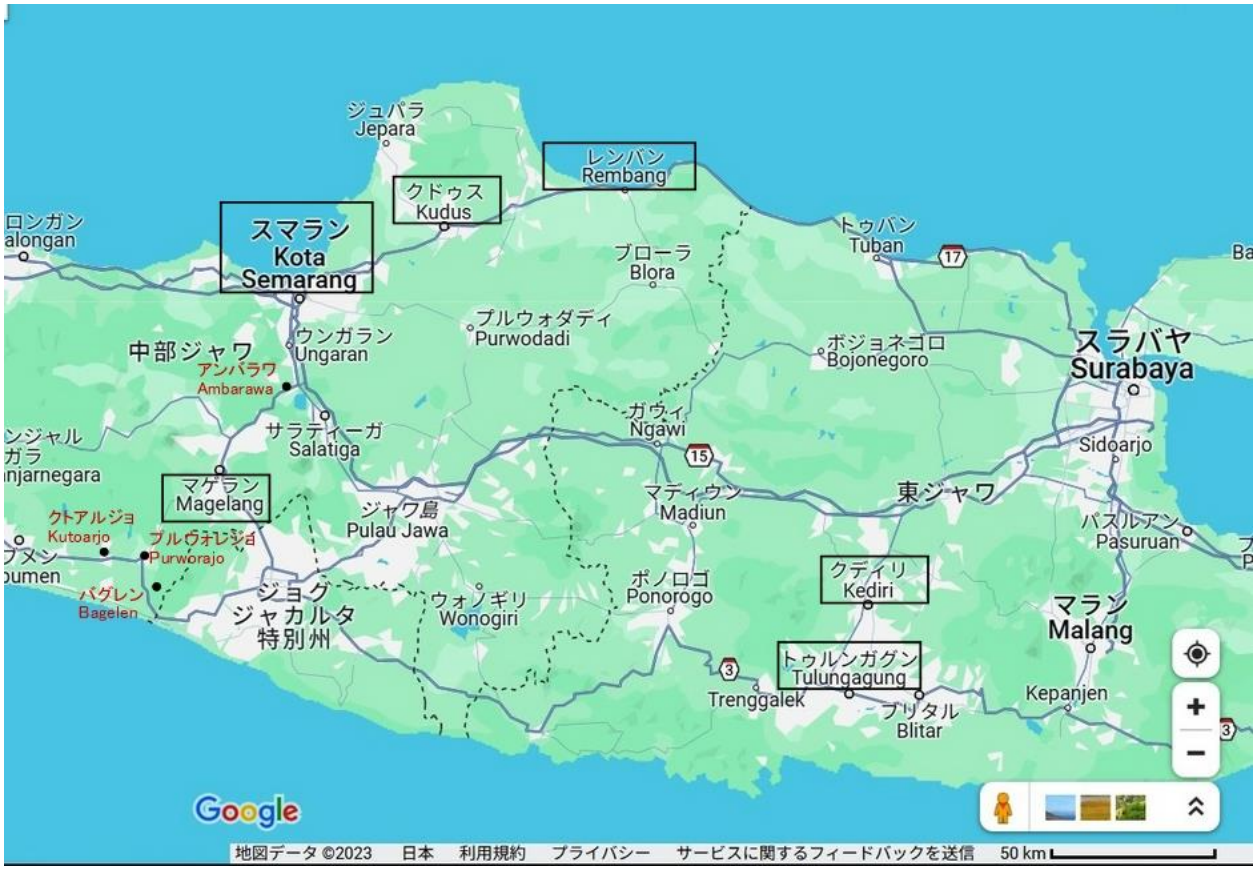
ベー・ビアウチョアンは新客(インドネシア語の singkek は中国からインドネシアに来た華人一世)が作った二世の子供で、中国からジャワ島にやってきた父親とジャワの華人系プラナカン娘が結婚して産んだ長男だった。ベーとは「馬」姓の福建語発音だ。かれはスマラン華人社会の大物タン家の娘と結婚して上流階層の仲間入りをし、1846年にレッナンチナ、1854年にカピタンチナ、1862年にマヨールチナの座に就いた。

1860年代にアヘン公認販売人のライセンスを政庁から得たベー・ビアウチョアンがアヘンビジネスを盛んに行っていたところ、1863年になってそのビジネスの中に非合法活動があることを摘発されてビジネスライセンスを抹消され、罰金を科された上にマヨールチナの座をはく奪された。

植民地政庁最高裁判所への再審請求を続けた結果、1872年になって先に下された判決が取り消され、かれはアヘンビジネスを再開するとともにマヨールチナの座に返り咲いた。そして1904年に没するまで、マヨールとしてスマランの華人社会に君臨した。

ベー・ビアウチョアンがジャワ島の中部地方各地に設けたアヘン販売代理人にアヘンを送り、そしてその販売代金を送って来させるために、その時代はすべて自分が使用人を使って行うのが当然のことになっていた。鉄道はまだどこにも走っておらず、ジャワ島最初の鉄道公共輸送機関が稼働したのは1867年で、スマラン～タングン間26キロを蒸気機関車が走った。

ダンデルス総督が作らせた大郵便道路とその支流の街道を往来する郵便馬車は走っていても、目的場所と郵便馬車駅の距離が離れていれば最初から自分の馬車を使って走り通すほうがはるかに安全で早い。そう、その時代は至るところに強盗団が出没し、金目の品や現金をくわえて逃げる泥棒もたくさんいたのだから。



だからスマランのマヨールチナの馬車がアヘンを積んでマグラン Magelang、アンバラワ Ambarawa、ルンバン Rembang、クディリ Kediri、トゥルンガグン Tulungagung、クドゥス Kudus、バグレン Bagelen などの町に走り、帰りに販売代金を抱えた販売代理人の会計係や番頭が同行してスマランに戻るのが普通の姿になっていたのである。

アヘン馬車の用心棒の仕事に就いたベー・カンピンはスマラン市内のマヨールの持ち家のひとつに他の使用人たちと一緒に住んでいた。大柄ではないががっしりした体躯をしていて、クンタオの実力も高く、また高慢な性格でなかったので一緒に住んでいる同僚たちとも折り合いが良く、みんながカンピンからクンタオの手ほどきを受けていた。拳豪の多くがそうであるように、カンピンも妻帯せず家族を持たなかった。

アヘン馬車用心棒の仕事はひんぱんにある。そのために用心棒が何人も雇われ、だれもがひと月に何度もあちこちの目的地に向かう馬車に乗った。カンピンはバグレンに毎月一回馬車の旅をした。スマランとバグレンの往復はヨグヤカルタを経由すれば便利で楽だったのだが、ヨグヤスルタン王国領に入るのに手続きが必要で、入境するのに rekest（申請）を出して翌日下される許可を得なければならず、それなしで領内に入ると逮捕されて一晩監獄入りさせられたから、バグレンに往復するときはヨグヤカルタを避けてクトアルジョ～プルウォレジョ～マグランというルートを通った。そのために旅はたいていマグランで一泊する二日間の行程になった。

あるとき、カンピンの護衛するアヘン馬車がバグレンの代理人にアヘンを届けた後、スマランへの戻り便に代理人の会計係が9千フローリンの現金を抱えて同行した。アヘン馬車がいつも御者と助手そしてカンピンの三人だけで往復するのがこの会計係には心細かったことから、現金をスマランに届けるときには二三人の仲間を誘って馬車に乗るのが毎回の振舞いだった。ところがその日にかぎって、仲間たちに用事ができてひとりも付き合ってくれる者がいない。会計係はしかたなくひとりで大金のお守をすることにした。

馬車客室の座席の下は頑丈な金庫になっていて、鉄の板で囲まれている上に大きい錠前で閉じられるようになっている。大量の銀貨がそこに隠された。錠前の鍵は会計係が持った。更に道中の飲食物が客室内

にたくさん持ち込まれた。そのルートが食堂や茶店などのまったくない地域を通るためだ。出発の用意が整ったので会計係は御者のマルトに出発を命じた。マルトは2頭の馬に鞭をふるった。馬車はクトアルジョに向かう田舎道を進む。ひどい田舎道は乾季にすさまじい土埃を立て、雨季にはぬかるみを作って車輪が深い穴に落ちると車軸まで泥の中に沈んだ。[続く]

「クンタオ（５）」（2023年11月24日）

プルウォレジョを過ぎたがマグランまではまだ遠い辺りにさしかかったのが、午後の太陽が傾き始めたころ。人家のまったくない草と林に囲まれた田舎道を通っていた馬車を御者のマルトが急停止させた。道の両側の木に結び付けて張られたロープが馬車の進行を妨げているのだ。マルトは客室の壁を外からコンコンと叩き、「仕事ができたよ。」と普通の声で客室内のカンピンに言った。会計係の顔が蒼白になった。

マルトはがっしりした体躯の中年男だ。かれは少しも騒がず、家伝の宝物である自分のクリスを鞘から抜いた。助手のシミンは泣きそうな顔で「助けてくれ」と叫んでいる。そのとき、１１人の男たちが手に手にさまざまな刃物を持って馬車を取り巻いた。カンピンは馬車から降りて馬車の横に立つ。

馬車の一番近くまで寄って来た男が「金を置いて行け。それともひどい目に遭いたいか。」と言う。どうやらこいつが盗賊団の首領のようだ。「われわれは何も持っていないぞ。」とカンピンが言う。

「ふざけるんじゃねえ。オレたちゃ、おめえたちが何者か知ってるんだ。」首領はそう言って手下に合図した。６人の手下が馬車に近寄って来た。カンピンはその前に立ちはだかって足を回し、ふたりの足をすくって地面に転がした。賊たちが驚いて身構える隙も与えず、カンピンは首領に飛び掛かるとその両腕をつかんで後ろに回し、首領の後に立った。

手下たちが武器を振るおうとすると、首領の顔をそっちに向けて押し出す。そして手下たちに怒鳴った。「ワシの連れに手を出すと、こいつを殺すぞ！」

同時に首領の両腕をねじったから、首領は痛みに耐えかねて叫び声をあげた。手下たちはあとずさった。

カンピンは首領に命じて手下にロープをほどかせ、馬車が通れるようにし、そしてマルトに馬車を進ませるように命じた。「ワシを待たずにここを離れろ。」馬車は進み出した。

馬車が見えなくなるとカンピンは首領の腕を放して「さあ、全員でかかって来い。」と言った。全員が武器をふりかざす。カンピンは腰に巻くベルトの布だけを手にしている。乱闘が始まり、賊のひとりから布を使って短槍を奪い取ったカンピンは、槍の柄を使って一味を打ちのめした。６人が打ち倒されて地面に伸びたのを見て５人が逃げ出したものの、カンピンは執拗にそれを追いかけ、ついに１１人全員を地面に転がしたうえで馬車の後を追った。

ただし、後遺症になるような撃ち方を誰にもしておらず、数日経過して痛みがなくなればまた五体満足な身になって働くことができるように手心を加えてある。その格闘の舞台を去る前にカンピンは脚に打撲を負って動けなくなっている首領に言い聞かせた。自分の名は誰でどこそこに住んでいるから、恨みを晴らしたければいつでもやってこい。「しかしワシが乗っている馬車にまた手を出したら、お前の脚を粉みじんにして歩けなくしてやるから覚えて置け。」

それ以来、アヘン馬車はその地域で二度と強盗団に襲われることがなかった。ところがバグレンの会計係が一緒に乗るときだけは決してその道を通らなかった。会計係がジョクジャを通るように懇願したのだ。

ベー・カンピンのエピソードには、スマランとクドゥスでかれが行った人助けの活躍などもある。スマランの街中を暴走する馬車をカンピンが素手で止めて事故が起こるのを防いだ話はこんなストーリーになっている。

そのころ、馬車は行政高官や大金持ちの持物であり、一般庶民には縁のない交通機関だった。今のタクシーのような賃貸しのサドはもちろんあったが、一般庶民が日常生活の中で使うものではなく、郊外や隣の町へ行くような場合にしか使われず、少々遠くてもスマランの街中であればみんな徒歩で移動した。昔はインドネシア人も遠距離をよく歩いていたのである。[続く]

「クンタオ（６）」（2023年11月27日）

その時代の「賑やかな市街」という言葉は路上をたくさんの通行人が歩いていたという情景を示しているのである。もちろんその中には天秤棒で荷をかついだり、荷車に貨物を載せて押したり引いたりする者もたくさん混じっていた。

映画もまだ発明されていなかったその時代、一般庶民の楽しみは各地を巡業してまわるコメディ、スタンブル、ワヤンオランなどの一座がスマランの町に舞台を張るとその見物に集まるくらいで、庶民が金を使う娯楽はほとんどないようなものだったから、稼ぐ金額が小さくても質実な生活を営んでいれば十分に暮らしていけた。

もちろん金持ち華人がそんな生活で満ち足りるはずがなく、ガンベセンには賭博場があったし、アヘン吸引所や酒と女で遊べる店も営業していた。そのような場所はプリブミ庶民にとっての異界魔界に等しいものであって、かれらが近寄る場所ではなかった。

オランダ人・華人・プリブミを問わず行政高官や金持ちなど上流階層のひとびとは、夕方になると馬車で郊外の景色の良い場所へしばしば家族連れで出かけた。レシデン閣下の馬車はミロール型の客車をオーストラリア馬2頭に引かせたもので、御者と助手はモールと金メッキのボタンで飾った黒の制服を着ていた。

レシデンの部下に当たるレヘントやパティも馬車を持ったが、上位者への敬意を示すためにレシデンの馬車をしのぐ華美な飾りつけはせず、備え付けられる傘の大きさで誰の馬車なのかが判断できた。

時のスマランレシデンの座にあったのはファン・ホーヘンベルフ閣下だ。マディウンの副レシデンを務めていたころから有能公正でだれにも優しく振舞う人間性が世の中に認められ、政庁内行政機構の中でのみならず原住民社会にもたくさんのファンができて将来を嘱望されていた。

ある日の夕方、レシデン閣下が妻と娘を連れて馬車で郊外の高原に遠出をしようとしていたところ、レヘ

ントが急用を持って訪れたために政務を優先せざるを得なくなった。レシデンは、夫人とまだ少女のネリーお嬢さんがふたりだけで出かけるように言い、自分はレヘントと執務室に入った。

女ふたりが乗っている馬車はレシデン邸を出てヒーレンストラートに向かう。そのころは貴人の馬車と路上で出会うと、通行人は道路の端に寄って帽子を取り、プリブミ庶民はしゃがむのがしきたりになっていた。華人は帽子を取ってお辞儀した。

ドゥエッ～グンディガンの四辻にさしかかったとき、突然馬が興奮して暴れはじめた。助手が降りて馬をなだめようとしたものの、効果がない。それどころか、いきなり二頭ともに走り出したのである。御者が手綱を引いて止めようとしたが制御不能になった。客車の女ふたりは悲鳴をあげた。

路上にいるひとびともこの突然の異変に驚いて騒ぎ始めた。たいていのひとは「助けて！助けて！」と叫ぶばかりで、それ以上のことはしない。と言うよりも、自分が何もできないことが解っているのだ。レシデン夫人はまだ幼い娘を抱きしめて震え上がっている。御者は御者台から周囲の通行人に「馬を止めてくれ！」と叫び続けているが、馬の扱い方すら知らない人間に暴走する馬の止め方など分かるわけがない。同情心に突き動かされて馬車と一緒に走る者が何人もいたが、かれらも御者と同じ言葉を叫ぶばかりだった。[続く]

「クンタオ（7）」（2023年11月28日）

そのころ、ベー・カンピンは同僚のソウ・カムチャイとアルナルン[1]でぶらぶらしていた。とそのとき、騒ぐ物音が遠くからこちらに近付いてくるのに気付いて注意を向けた。西の方角から暴走する馬車が大勢の人間に取り巻かれてこちらに走って来る。「馬を止めてくれ」と言うひとびとの叫び声がかれの耳にはっきりと入ったから、カンピンは何が起こったのかをすぐに察した。

[1] Alun-alun 町の中央広場

カンピンは路上に立ちはだかって馬車が近寄って来るのを迎えた。馬がカンピンをひずめにかけたと思った瞬間、かれは2頭の馬をつないでいる横木をわしづかみにして力をこめた。馬が止まった。カンピンはしばらくそのままの姿勢を続けた。

レシデン夫人はネリーを抱えて馬車から降り、馬車を止めてくれた華人に目を止めてから、アルナルンの南側にあるレヘント邸に急ぎ足で向かった。レヘント夫人であるラデンアユはレシデン夫人が徒歩でやってきたのに驚いたが上司の夫人を歓迎して茶の用意をした。

レシデン夫人はついさっき起こったばかりの恐怖のできごとをラデンアユに物語り、暴走馬車を止めてくれた新客華人が何者なのかを調べてほしい、と依頼した。ラデンアユはすぐに使用人にそれを命じ、ほどなく戻って来た使用人からベー・カンピンの名前とマヨールチナに雇われているクンタオの達人だという報告を受けた。

一方路上では、馬の荒れが鎮まってからカンピンは御者に馬だけを厩舎に連れ帰るよう勧めた。四辻に取り残された助手が追いついたので、御者と助手はそれぞれ馬だけを引いて厩舎に戻り、別の馬を連れてきて馬車につないだ。そしてレヘント邸に馬車を回し、レシデン夫人とネリーをレシデン邸に連れ帰った。

翌日、レシデンが自らマヨールチナの屋敷を訪れた。レシデンは夫人から聞いた話をマヨールに物語り、たいへんな力と技を持つ人間をこの目で見てみたいので会わせてほしいと頼んだ。さっそくマヨールはカンピンをそこに呼んだ。

レシデンはカンピンに礼を述べ、形だけの謝礼だが受け取ってくれと言って50フローリンの入った封筒を手渡した。そしてカンピンの仕事の内容や、クンタオの修行の話などを聞き、レシデンは喜んで帰って行ったというのがこの話だ。

別の折、カンピンはクドゥスからパティ、ラスム、ルンバンを回ってアヘンを届ける馬車の護衛の任に就いた。そのころクドゥスのプチナンに華人の金持ちが住んでいた。20年くらい前にアモイからやってきた新客で、最初はスマランの親戚の家に着の身着のままで転がり込んだそうだ。そのころの名前はチュン・ヒアンと

言った。

スマランで数年暮らし、その間、厄介になっている家の仕事を手伝いながらジャワでの生活と商売について必要な知識を吸収し、クドゥスに移って自分の商売を始めた。まず焼き物の食器類を扱い、徐々に商売が進展しはじめたころに塩魚を扱うようになった。華人系プラナカン娘と結婚したのはそのころだ。夫婦の間には男女それぞれ3人の子供ができた。妻の母親の暮らしが気の毒だったので、引き取って自分の家に住まわせた。

かれは自分がそうされたように、同郷の新客を迎え入れて仕事を手伝わせ、給料を与えた。つまり使用人にしたわけだが、この種の恩がからむ雇用関係というのは現代的な雇用関係とはまた色合いが大きく違っている。かれはそんな使用人のひとりに大きくなった長女を娶せて自分の婿にした。

商売はさらに発展してクドゥスの華人コミュニティでひとかどの分限者と認められ、成功者のラベルが貼られた。プチナンに家を何軒か持ち、商売のための牛車を数台持ち、そして離れた場所にヤシ農園を持った。

クドゥスに移って成功者になったかれは、自分の名前をチュン・ゴアンヒアンに変えた。二文字の名前は大人 tayjien の貫禄にふさわしくないということなのだろう。二文字名の者が成功者になると三文字の名前にするのが華人の習慣だそうだ。[続く]

「クンタオ（8）」（2023年11月29日）

クドゥスのプチナンは Bitingan 地区にできた。パサルビティガンはクドゥスのアルナルンから1．5キロほど南にある。チュン・ゴアンヒアンはプチナンの目抜き通りに邸宅を建てて住んだ。通りの中心部にある一番大きな邸宅がかれの家だった。華人富裕者層がどこの町でもそうしたように、邸宅の建築様式は中国式のもので、壁には煉瓦を積み屋根は瓦葺きだった。

そこには敷地の上にふたつの建物が作られてつなぎ合わされた。表屋は前と両脇に出入口を設けたが、裏屋は表屋とつながるところにしか出入口がなかった。かれはそんな方法で使用人が荷抜けするのを防いでいたのである。自分が表屋の出入り口を見張っているかぎり、使用人がひそかに商品を外に持ち出したり

外の仲間に渡すことはできない。

その時代の新客成功者は、コミュニティで分限者のひとりに数えられるようになったあとでも貧困時代のライフスタイルを続ける者が少なくなかった。子孫のプラナカンたちとの大きな違いがそれだった。いくら同じような中華文化に即したライフスタイルを示していても、プラナカンは稼いだ金で人生を愉しむことが重要な目的になっていた。

ゴアンヒアンの普段の食事は白飯と塩魚や豆腐、野菜あるいは漬物だけで済ませ、着物もほころびや破れが何カ所もできるまで新品に替えなかった。ひんぱんに水牛肉や豚肉や牛肉のおかずを妻が用意したために、妻が夫に叱られたという話もある。だからゴアンヒアンもクドゥスの華人コミュニティでは吝嗇のシンボルのように言われていた。

ゴアンヒアン自身が毎朝暗いうちに起きて商売の準備を始め、ザルの用意などを自分で行い、夜明け前からパサルに行く。大店を構えたあとでも、かれの昔からの日課には変化が起こらなかった。使用人が出勤しようが休もうが、かれにはどっちでもよいことだったようだ。かれのカレンダーからは休日という文字が失われていた。

7月のある夜、寝静まったプチナンに火事が起こった。ゴアンヒアンの邸宅の表屋で出火したのだ。折からの強い風が乾季で乾いた家屋に火の回りを速めさせたため、その家の者は火と煙の中で目を覚まし、命からがら家の外に逃れたのだった。もちろんゴアンヒアンも例外ではない。

外に逃れてほっとした直後、かれは自分のたくわえた金のことを思い出し、このままではすべてが灰になってしまうと考えて断腸の思いに駆られた。その当時、鉄製金庫などというものはまだ珍しく、たくわえた金銭を錠前の掛かる頑丈な木の箱に入れて保管するのが普通一般の華人事業者たちのならわしになっていた。海賊船の物語によく出て来るあの宝箱みたいなイメージの箱だ。その箱は燃えるのだから、中身も燃えるに決まっている。

20年の歳月をかけ、身を粉にして働き続けた結果できた自分の分身がその全財産だとゴアンヒアンは感じていたのだろう。その半ば以上がいま目の前で灰になろうとしている。それを正気で見ていられるわけがない。

ゴアンヒアンは傍らに立っている妻に「アイヤー。金箱を持ち出すのを忘れたぞ。あれを取ってこなきゃ。」と言って火の中に入ろうとしたから、妻は夫にしがみついて止めた。表屋の入り口は燃え盛っていて、たとえそこを通って中に入れたとしても、二度と出て来ることはできるまい。

妻は周囲にいるひとたちに「このひとが無茶なことをしないように止めてください。」と叫んだから、隣人が服をつかんで制止しようとした。しかし冷静さを失っているゴアンヒアンは「金を、金を・・・」と叫びながら制止の手を振りほどこうとして暴れる。

数十人のひとびとが火勢を弱めようとして建物に水をかけたり火を打ち崩したりしているが、火は表屋の全域を包み始めた。[続く]

「クンタオ（９）」（2023年11月30日）

ゴアンヒアンが暴れているところにがっしりした体躯の華人がひとりやってきて、自分が金箱を救い出そうと言う。そしてゴアンヒアンの部屋の位置を尋ねた。ゴアンヒアンは表屋の右の一番奥だと言ってその位置を指し示した。幸い、その一画はまだ火がそれほど大きくなっていない。華人はその場所に走って外壁を建物の外から蹴った。壁に小さい穴が開いたから、さらに蹴りを加えて人間が通れるくらいの穴を作り、その男はそこから建物の中に入って行った。

そしてしばらくしてから、ゴアンヒアンの金箱が外に引きずり出されてきたのである。男はふたたび中に入り、ゴアンヒアンの部屋に置かれている重要そうな物をいろいろと運び出した。ゴアンヒアンは大喜びだ。ところが、ほっとして正気に戻ったゴアンヒアンが周囲を埋めている野次馬を眺め渡して火から逃れ出た一族と使用人を目で探し、姑と娘のひとりの姿が見えないことに気付いてまた叫んだ。「アイヤー、義母さんとチ

ュンスイはどこだ？」

今度はゴアンヒアンの妻が泣き叫んで暴れる番だ。即座にその救難者の男はふたりの寝室の位置を尋ねた。裏屋の中の寝室の位置を示された男は、裏屋にまだ火が燃え移っていないから大丈夫だとみんなを安心させた。しかし裏屋の出入り口は表屋につながっていて、激しく燃えている表屋を通らなければ裏屋から外に出られない。

ゴアンヒアン一家の救いの神は裏屋に走り、適切な位置に蹴りを加えて壁を破ると中に入って行った。そして老婦人をひとり連れ出してきてゴアンヒアン夫婦に委ね、もういちど裏屋に入って気絶している娘を抱え出した。活を入れられた娘は意識を回復し、親に抱き付いて泣いた。

男はまた裏屋に戻って外に出せるだけの品物を運び出した。壁の外に手伝いをする者が何人も待ち構えて、男が運んでくる物を受け取って火から遠いところに置いた。

この火事は表屋を全焼し、裏屋も半分ほど燃えたが、明け方には鎮火した。ゴアンヒアン一家はその近くに別の家を持っていたので、焼けた家を建て直す間、そっちの家に住んだ。この一家の暮らしには特に大きい障害が起こらなかったのだが、恥ずかしいことに鎮火するまで家の外で燃えるわが家を眺めていたひとびとのだれひとりとして、救いの神の名前や住所を尋ねることをしなかったのだ。その男はやるべきことをやった後、朝まで火事の見物をしないままに姿を消した。

ゴアンヒアンは隣近所のひとびとに昨日の男を知らないかどうか尋ねて回ったが、知っている者はひとりもいない。このプチナンで見かけたことがないとだれもが言う。多分よその町の住人でたまたま昨夜この近くに居合わせたのだろう。少なくともこの近辺に泊っているだろうから、あてもないが探してみようと思ってゴアンヒアンは歩き出した。

しばらく歩き回っていると、アヘン販売所の表にその男が立っていた。ゴアンヒアンは即座に近寄ってその男の前にひざまずこうとしたが、その男は素早い動きでゴアンヒアンの両手を取って立たせた。

救いの神現る

「あなたのようなタイジンがなぜそんなことをするのですか？」

「昨夜はあなたのおかげでわたしの一家が破滅から救われた。このお礼の気持ちを示すのにこんなことだけではまだ不十分です。」

「そんな大げさに考える必要はありませんよ。困っているひとに手を貸すのは人間の義務だから、わたしは自分の義務を行なっただけです。あなたが負い目を感じる必要はありません。」

という話から互いに自己紹介が始まり、男は自分の名をベー・カンピンと言い、アヘン馬車の護衛をしてときどきクドゥスにアヘンを届けに来ていることをゴアンヒアンに話した。ゴアンヒアンはカンピンを食事に招き、断るカンピンを拝み倒して家に来てもらった。ゴアンヒアンの妻も腕によりをかけてご馳走を作り、家族一同がカンピンを歓待した。[続く]

「クンタオ（10）」（2023年12月01日）

明朝自分は馬車の護衛の仕事でクドゥスからパティに向かい、その後ラスムとルンバンを回ってスマランに帰るから、その準備のために自分はこれで失礼する、とカンピンがゴアンヒアンの一家にいとまを告げると、ゴアンヒアンはお礼の気持ちとして4百フローリンの入った封筒をカンピンに差し出した。しかしカンピンをそれを決して受け取ろうとせず、自分は独り身であり、しかも旅をするのが仕事だから、そんな人間がこんな大金を持ったら金の保管に困ってしまうと説明した。自分はまだ大金を必要としていないから、この金は預かっておいていただき、自分が中国に帰るときに頂戴したいと言うとゴアンヒアンも納得した。

それ以来ふたりは親交を深め、ゴアンヒアンが商用でスマランへ行くと必ずカンピンの寮に立ち寄り、いろいろな話をした。ゴアンヒアンは毎回衣服や食べ物などさまざまな手土産を持って行ってカンピンに渡したから、カンピンは閉口したという話だ。5月15日の龍王の祭日には粽を山のように贈り、8月15日の中秋節には月餅を山のように贈り、陰暦正月には絹の着物をたくさん贈ってきたから、カンピンは何度も何度もそれをやめるようにゴアンヒアンを説得した。

オランダ東インド政庁はアヘンの公認販売を1910年に廃止した。それを機に、ベー・カンピンはスマランを後にして中国に帰ったそうだ。

ベー・カンピンと同時代のひとに、Louw Djing Tie[2]がいる。Louw Djeng Tie と書く人もいる。ロウ・ジンティは1855年に福建省海澄県の貧困家庭に次男として生まれた。長男とは年齢が離れていて、長男が成人したときジンティはまだ6歳だった。その下に妹がいた。ジンティは小さいころから度胸があって負けず嫌いだったので、村の子供らと毎日喧嘩ばかりしていた。

長兄が旅に出た後、しばらくして両親が相次いで没したため、ジンティと妹のジンヒアンは親戚に引き取られたが、ジンティの家よりもっと貧しいその親戚の家でふたりはたいへんな苦労を味わった。旅に出ていた長兄が戻って来て弟妹を引き取り、ふたりにクンタオを教えたものの、長兄には教えきれなかったためにジンティを河南省嵩山少林寺に入れて修行させた。

6年間の修行で少林拳の優れた生徒として認められたジンティは、修行を終えると故郷の両親の家に戻り、妹とふたりで農業を始めた。村で一二を競うクンタオの達人と言われ、希望する村人にクンタオを教えた。もちろん妹にもクンタオをしっかり仕込んだから、ジンヒアンもクンタオの達人に育った。しかしジンティの胸の奥には、クンタオの道をもっと深めたいという希望が燃えていた。

ジンティはクンタオの師を探し、カオサンの山頂にある寺の住職が達人であるという情報を得たので、かれは妹と別れてカオサンに向かった。カオサン寺には20人ほどの学僧が住職の指導のもとに暮らしており、ジンティはそこに迎え入れられて弟子のひとりになることができた。

僧侶になりたいのでなくクンタオの道を極めたいので師事したいと願い出たジンティを住職のビアウチエ

[2] 盧清池

ンは気に入ったらしく、「ここは僧侶になるための修行の場であり、そうでない人間がここで暮らすのを認めたことはなかったが・・・」と言ってジンティに特別の許可を与えた。その結果、学僧たちの中に剃髪していない者がひとり混じることになったものの、ジンティは弟子仲間たちと仲良く修行の日々を送った。仏僧になるための生活がどのようなものであるのかを少林寺ですでに経験済みだったかれは、仲間の弟子たちの学習に支障をもたらさないためにどうすればよいのかを十二分に心得ていた。

ジンティはカオサン寺で6年間学んだ。ビアウチエンが期限を定めない旅に出るとき、師はジンティに別の師カン・トースーを紹介してくれたので、師匠を換えた。そしてカン・トースーの下で7年間修行を続け、もう教えることがないという折り紙をもらってジンティの修業時代は幕を閉じた。これからは自分で金を稼いで生きて行かなければならない。既に身に着けた高い技術で世の中を渡って行くことになる。クンタオと医術、そして手品という三つの分野でジンティは優れた腕を発揮した。[続く]

「クンタオ（１１）」（2023年12月04日）

カン・トースー師の武館を去ったジンティは、福州へ行ってトースー師の弟子仲間たちと一緒に拳道武館を開き、生徒を集めた。それからほどなくして、福州政庁が軍隊兵士にクンタオを教える教師を募集したので、ジンティと仲間の数人が応募した。

その公開テストが行われる日、ジンティと仲間たちは朝早くからテスト会場に向かった。広場に設けられた闘技台で試験官の拳道師と手合わせし、試験官が合否を決めるのだ。一千人を超える老若男女で埋め尽くされた広場では、闘技台の上にふたりの政庁高官と拳道師が椅子に座っており、闘技台の下にも高官が数人椅子に座っていて、その周囲には進行係の役人や警官や兵隊の姿も見える。闘技台の左右に立てられたポールに黄色い旗が掲揚された。催事開始の合図だ。

闘技台に座っていた高官のひとりが前に進み出てこの催事の主旨を説明し、「本当にクンタオの力がまだ高くない者はこの試験に出ないほうがよいぞ。」と最後に言ってから、試験官の拳道師を紹介した。受験者

のひとりが闘技台に上って自分の名前を言い、拳道師と対戦する。拳道師の攻めに押されて闘技台の端まで下がったその男は闘技台から飛び降りて群衆の中に消えた。

二人目の受験者も似たような結果になった。そして5人が続けざまに失格したので、ジンティの仲間のひとり、リム・ワンが闘技台に上がった。対戦が始まり、まったく互角のまま時間が経過して行く。会場は大いに沸き、参観している高官たちの顔にも微笑みが浮かんでいる。素晴らしい達人が見つかったという歓びだろう。

ところがリム・ワンの心の中に邪心が生じた。この拳道師を倒して自分の名を福州に轟かせたい。闘技台の上では試験官に技術のレベルを示して見せるだけのものだったはずが、突然本気の格闘試合に彩が変わった。方針を変えたリム・ワンの攻めが拳道師に加えられたとき、下にいるジンティと仲間たち、そして対戦していた拳道師にもリム・ワンの変化がありありと判った。ほとんどの見物人にそんなことは解らなかっただろう。

拳道師はリム・ワンの攻めを外すと、この高慢な受験者に思い知らせてやろうとして必殺の反撃を加えた。リム・ワンの本格攻撃を見て仲間たちが声を上げたとき、その成り行きが読めていたジンティは闘技台に跳び上がって拳道師に蹴りを加えた。ジンティがそれをしなければ、リム・ワンはこの先、運が良くてもかたわ者の人生を送る破目になっていたにちがいあるまい。

不運だったのは試験官の拳道師だった。高慢ちきな受験者の加勢が不意に出現するとは思ってもいなかったのだ。この拳道師もリム・ワンに思い知らせてやろうなどと考えなければ、ジンティに攻められることは免れたかもしれない。だがそれは起こってしまった。ジンティの蹴りは拳道師の急所を撃ち、拳道師は助からなかった。ジンティとリム・ワンはすぐに闘技台から跳び下りて群衆の中に紛れ、逃走した。現場の警備に当たっていた警官や兵隊はふたりを取り逃がしてしまった。

主催者の政庁にとってそのできごとは卑怯な殺人事件としか見えなかった。ましてや政庁の催しの中で

行われた犯罪だったから、面目潰しもいいところだったようだ。警察と軍隊はやっきになってジンティとリム・ワンを探したが、ふたりの肩を持つひとびとが大勢いたため、両人はあちらこちらにかくまわれ、日月が人間に怒りを忘れさせると殺人犯探索の手も緩んだので、ふたりは厦門に逃げた。

リム・ワンはアモイで医者になって生きていくことを選択した。一方、ジンティは中国を去ろうと考えていた。殺人者としてお尋ね者になった以上、南洋に雄飛して異国で自由に生きるほうがよい。かれはシンガポールに向かう船に乗った。[続く]

「クンタオ（１２）」（2023年12月05日）

南洋ではどこの都会にも同郷華人の組織があり、その町にやってきた同郷の新客は親類縁者や知り合いがいなくても郷土人の互助会が持っている寮に無料で宿泊できた。広東人・福建人・潮州人・海南人などの互助会も、たとえば潮州人がたくさん住んでいる町には潮州人の互助会が複数作られたから、潮州人はその中の住みやすい寮を頼ればよかった。

またその時代、南洋に大勢の華人が移住して故郷との間で手紙のやり取りをしたのだが、そんな時代に国際郵便などまだ存在していなかったから、たくさんの手紙を携えて船に乗り中国の故郷と南洋を往復するメッセンジャー商売も盛んに行われた。このシステムとそれを行なう人間のことは cui-khek と呼ばれた。南洋に向かう船に乗るとたいていそのチュイケッが数人乗っていて、南洋の町々の最新情報をかれらから仕入れることができた。

ジンティはチュイケッのひとりからシンガポールの様子を詳しく教えてもらい、上陸したあとすぐに福建人の寮を訪れてそこに滞在した。先にその町に住んで商売しているひとびとは寮にやってきた新客を使用人にして仕事を与え、数年後に独立させるということをするのが普通で、同じ姓の新客に優先して助力を与えた。

シンガポールでできた知人が数日後にジンティを同姓の商店主に紹介してくれた。ジンティがクンタオ師

だったために、その商店主はジンティに「店に泊まって他の使用人たちにクンタオを教えてほしい。使用人たちがそう希望している。」と頼んだ。ジンティはその店に移って仕事を手伝い、店の営業時間外に使用人たちにクンタオを教えた。

店の常連客の中にシンガポールに住んでいるムラユ人の高名なシラッの師がひとりいて、真のクンタオの達人の実力を目の当たりにして驚嘆したという話が残っている。ジンティはしばらくシンガポールで暮らしていたが、ジャワからシンガポールに商用や遊びに来てその店を訪れる華人たちが口をそろえて、ジャワの方がシンガポールよりも栄えていると物語ったから、興味を引かれたジンティはジャワへ行くことにした。

シンガポールで世話になったひとびとに惜しまれて、ジンティはバタヴィア行きの船に乗った。バタヴィアに着いてプチナンに向かい、知り合いの華人が経営しているトコティガ地区の店で働くことになった。そこの主人が世話してくれたので、かれは店の雑貨品を担いで売り歩く商売を行なってみたものの、店側にとっては経費倒れのビジネスにしかならなかった。しかしそんな商売のことよりも、ジンティにはバタヴィアというオランダ東インド最大の政治経済都市があまり性に合っていなかったようだ。バタヴィアが自分に合っていないと感じたジンティはスマランに移ることにした。

スマランでロウ姓の先達の店でしばらく商売を手伝いながら過ごし、そのあとスマランから20キロほど西にあるクンダル Kendal に引っ越して塩魚の商売を始めた。新客華人のだれもがそうしたように、ジンティも日銭で生きる質素な暮らしをし、毎朝早く商売物を担いでパサルへ行き、昼過ぎてから家に帰って翌日の商売の準備をするという日々をクンダルで送った。

スマランよりはるかに小さいクンダルの華人コミュニティでジンティはすぐに知り合いを増やし、けが人を武闘医術の腕前を使ってしばしば治療したから、塩魚売りはクンタオの達人であるということで有名になった。医術の腕が良いという評価は、けが人の怪我が早く治り、また怪我する前の状態にどこまで回復したかという結果を見てなされるものであり、ジンティが治療したけが人たちが治療の結果にたいへん満足していたことをそこからうかがい知ることができる。[続く]

「クンタオ（１３）」（2023年12月06日）

ある日、知り合いになったアンバラワの住人がジンティに、アンバラワに引っ越してはどうかと勧めた。多分ジンティの塩魚商売がろくに発展しないのを見かねた結果だろう。ジンティ自身も自分が商売に向いていないことは経験からよく判っていた。

アンバラワはクンダルよりはるかに大きい町で、華人コミュニティももっと大きい。商売などしないでクンタオを教えるだけで十分生活して行くことができる。ジンティはその勧めに従ってアンバラワに移り、ひそかに拳道武館を開いてクンタオを教えた。たくさんの生徒が集まり、武館は賑わった。ひそかに行ったというのは、その時代にオランダ政庁がそれを禁止していたからだ。愚民統治行政方針はそんなところにも影を落としていた。

たくさんの華人がクンタオを学びたがったのは、かれらの多くが商売のために荷を担いで田舎の村々を巡回する仕事をしていたからだ。田舎を回ればほとんどプリブミばかりが住んでいて、治安は村々の自治機構が行っているだけだから、村と村をつなぐ道は危険がいっぱいのアウトロー空間になっていた。用心棒を雇えない人間にとっては、自分の身は自分で守るしかないのだ。

ジンティはアンバラワで、拳道武館の師匠として、また同時に優れた中国医として、知る人ぞ知る人物になった。友人知人もたくさんできたが、特にその中でプチナンに医薬所を開いているティン・キムシアと深い親交を結んだ。キムシアも医は仁術を実践する人物であり、貧しい患者から礼金を受け取らなかった。

その時代、医者はたいてい呼ばれて患者の家へ行くのが普通だったようだ。医者に往診してもらうと、患者は2フローリン[3]の礼金を紅包に入れて支払うのがしきたりだった。貧しい家でも最低1フローリンを支払った。ところがキムシアは2フローリンだけを受け取り、1フローリンは受け取らなかった。

[3] 現在価値にして 2000 円程度か。

ジンティとキムシアはとても気が合ったようで、ジンティがキムシアの家をひんぱんに訪れていろいろな話に興じているのをひとびとが見て、ふたりは義兄弟の契りを結んだのではないかという噂が立ったこともあったが、このふたりの親友付き合いはそういう種類のものでなかった。ともあれ一時期、ジンティはキムシアの医薬所に入り浸った。

その医薬所からあまり離れていない場所に新客華人の食べ物ワルンがあり、そこは夕方になるとコーヒーを飲んだり、飯や菓子を食べる客で賑わった。客は店で飲食しながら長時間雑談するのがいつものふるまいだった。

ある日の夕方6時ごろ、ひどく酔っぱらったプリブミ兵士がふたり、ワルンに入って来て飯を注文した。店主は注文品をすぐに用意してふたりの前に置いた。酔っぱらった兵隊が突然怒り出して暴れたら手が付けられなくなる。店主はびくびくしていた。ふたりは飯を半分ほど食べてから、コーヒーをひとりにつき二杯持って来いと言った。店主はまた大急ぎでコーヒーを用意し、言われた通りにした。コーヒーが来ると兵士のひとりが立ち上がって菓子を取りに行き、菓子の載っている皿を手にするとそれを傾けて菓子を地べたに落とした。店主は哀願した。「そんなことはやめてくだせえ。売り物が売れなくなったら女房子供が明日は飯の食い上げになる。」しかし兵士はせせら笑って、今度はコーヒーの入った椀を地べたに叩きつけた。

店の中にいた客たちは、おかしな雲行きになってきたので店の外へ出ようとして動いた。しかし野次馬根性に駆られて店の外から事態の成り行きを高みの見物。そこへ通行人や近隣のひとびとも野次馬になって集まったから人だかりができた。ところが兵士の乱暴を止めようとする者がひとりもいない。

店主は涙声で「お代はいらねえから、どうぞお帰りください。」と懇願するが、兵士は居丈高に「この店とおまえを粉みじんにしてやる。」と脅かす。[続く]

「クンタオ（１４）」（2023年12月07日）

キムシアの医薬所の表にベンチを出してタバコを吸っていたジンティは、ワルンの表に人だかりができたのを見て事件が起きたことを察した。群衆がみんな外から店内を見ているのだ。ジンティは急ぎ足でそのワルンに向かった。

何が起こったのかを表で群衆から聞いたジンティは即座に中へ入り、ふたりの兵士の腕を取って店の外に押し出した。まるで悪童がおとなに外へつまみ出されたような光景だ。だが兵士ふたりはちゃんとした体格のおとななのだ。兵士は突然やってきて腕をつかんだチナ人の手を振りほどこうとしてもがいたが、まるで鋼鉄の萬力にでもはさまれたかのように華人の手はびくともせず、おまけにブルドーザーのような力でワルンの外に押し出されてしまった。

ジンティはふたりの手をつかんだまま表の通りに出て、兵営のある方角にふたりを押して進んで行った。そしてワルンから数百メートル離れた場所で手を放し、ふたりに華人ムラユ語でこう言った。Nah, pulang satja, sekalang suta malam ....[4]

酔っ払い兵士がジンティを罵倒し威嚇したが、ジンティは相手にせずさっさと来た道を引き返して行った。酔っ払い兵士は互いに顔を見合わせ、あきらめたようにふらつく足取りで兵営に向かって去った。

翌日の夕方、そのふたりの兵士がまたワルンにやってきた。今度は全くのしらふだ。昨日の華人がどこにいるのか教えろと店主に言う。店主が知らないと言うと、教えないと店の皿を全部割るぞと脅かす。しかたなく店主はキムシアの医薬所を指差して、華人ムラユ語でこう述べた。Tjiowa tuwang liyat ti walung owat sana.[5]

兵士ふたりは緊張した面持ちでキムシアの医薬所に向かった。

---

[4] 帰りな。もう夜だ

[5] あっちに見える治療所だ

そのときジンティはキムシアと表のベランダに座っていた。昨日の兵士ふたりがこちらに向かってやってくるのを見たジンティは、家の中に入って扉の鍵をかけるようにキムシアに言い、自分はそのままベランダのベンチに座ってタバコを吸った。

ふたりはベランダに来てジンティの顔をじっくりと眺め、昨日の男に間違いないことを確信してからジンティの腕をつかんで表の通りに放り出そうとした。ところがジンティは根が生えたようにそこを動かない。ふたりはジンティに殴りかかった。しかしふたりが繰り出すパンチをジンティは座ったまますべて素手で払いのける。ジンティがかれらの腕に自分の腕を打ち合わせると、ふたりは痛みで顔をしかめた。

かなわないと見たふたりは路上に引き返して大きめの石を拾い、ジンティに投げつけた。ジンティは飛んで来た石を片手でつかまえて下に落とした。その手も通じないことが分ったふたりは、槍くらいの長さの竹棒を見つけてジンティに攻めかかった。依然として座ったままのジンティは突いてきた2本の竹棒の先をつかんでちょっと引き、それからグイと押し返したから、ふたりは竹棒から手を放して路上に転がった。ふたりは「覚えとけ」と捨て台詞を残して逃げ去った。

次の日の夕方5時ごろ、キムシアの家に行こうとしていたジンティの自宅にキムシアの医薬所が暴徒に襲われているという知らせが届いた。ジンティはそのままプチナンに向かって走った。

キムシアの医薬所の表に15人くらいの兵士がいて、鉄の棒や鍬の柄に使う木の棒などを手にしている。刃物の golok（鉈）を持ってきている者がたくさんいた。医薬所の表のベランダは激しく荒らされ、いつもジンティが座るベンチは道の真ん中に転がっている。そして掲げられていた医薬所の看板が潰されて路上に横たわっていた。兵士たちが石を投げつけて破壊してようだ。

ジンティがやってきたのを見たふたりの兵士が他の仲間たちに合図した。こいつが攻撃のターゲットなのだ。兵士たちが一斉にジンティに向かってきた。ゴロッを鞘から抜いてジンティに打ちかかってくる者も少なくない。ジンティは鍬の柄で攻めてきた者からそれを奪い取るとゴロッを手にしている者たちの腕をそれで打った。打たれた者たちは痛みでゴロッを持っていることができずにポロポロと地面に落とす。同時に左右の足を使って武器を落とした者たちの足をすくったから、兵士たちはバタバタと路上に倒れた。兵士たちに蹴り

を入れることまではしない。

兵士たちも相手が強すぎることを十分に感じたようだが、中には倒されると起き上がって向かって行き、そしてまた倒されるというのを5回も繰り返した兵士もあった。そのうちに全員が戦意を喪失して現場から逃げ出そうとしたから、ジンティは「ウワー！」と大声をあげて後を追うふりをして見せた。兵士たちは必死になって走って逃げた。[続く]

「クンタオ（１５）」（2023年12月08日）

その後の数日間は穏やかな日々が続いた。兵士たちはジンティの強さに恐れ入ってあきらめたのだろうか？いやいや、そんなことはない。兵士たちはジンティが油断するのを虎視眈々と狙っていたのだ。

何日も経過したあとのある夜、パサルのそばに住んでいる友人に招かれたジンティがそこへ行こうとして外出した。街灯などない時代であり、パサルの周辺とはいえまだそれほど人家がたくさん並んでいるわけでもなく、木がうっそうと茂っている空き地もちらほらとある。

ジンティがパサルの近くまで来たとき、どの家の表戸もしっかりと閉じられていて路上に人間の姿はひとつもなかった。ジンティは普通の足取りで、招かれている家に向かって進む。ジンティが通り過ぎた大木の後からひとつの影が滑り出てきて、速足でジンティの後に音もなく迫った。そして手に持ったボトルを振り上げてジンティの後頭部に振り下ろしたのである。その瞬間、振り向いたジンティはその影が振り下ろして来た手をつかんで強く押し返した。影の手からボトルが吹っ飛び、影は仰向けに倒れた。

すると別の木の後から別の影が大きい刃物を手にしてジンティ目がけて斬りかかってきた。ジンティが体をかわして刃物を持っている敵の手をつかみ、相手を動けなくしているとき、またもうひとつの影が後ろから刃物を手にして攻撃してきた。そのときジンティ少しも騒がず・・・

中国が清王朝の時代、この異民族征服王朝は漢民族に辮髪を強制した。面白いことに、長い歳月の経過とともに、異民族文化だったはずの辮髪を漢民族は自分たちの伝統風習と思うようになっていった。清朝末期の時代、異民族支配から脱して漢民族の主権を回復する民族独立の思想が活発化し始めたころ、ジャワ島にやってきて現地在住華人、つまり漢民族（19～20世紀あるいはそれ以前に南洋に移住した満州人の話は聞いたことがない）に新思想の息吹を鼓吹しようとして学生たちが思想宣伝にやってきた。

あるときそのひとりが在住華人を集めて演説し、われわれは異民族文化から訣別しなければならないと言って辮髪を外した。つまりその学生は辮髪のかつらをしていたのだ。それを見た聴衆が、おまえこそが漢民族の伝統文化を汚している背徳漢だと言って怒り出した。そういうエピソードをプラムディア・アナンタ・トゥルが小説の中に書いている。

辮髪はヌサンタラで新客華人のシンボルになっていた。ヌサンタラにいる華人の外見だけを見てその者が新客かどうかを見分けるのに、辮髪をしているかどうかが判断の大きい手がかりになっていたようにわたしには思われる。

ジンティも辮髪をしていて、手がふさがっているかれに向けられた三人目の賊の攻撃に対抗するため、かれは自分の辮髪を使った。頭を振り回したから、近寄って来た敵の顔を長い辮髪が鞭打った。三人目の敵は武器を捨て、悲鳴をあげながら両手で顔を抑えてうずくまったのである。鞭がその者の目に当たったのだ。

ジンティに取り押さえられている二人目の敵が力を抜いて刃物を下に落としたので、ジンティはその者を放した。目を傷めた男を助けながら三人は逃げ去った。ジンティはまた大声をあげて追いかけるそぶりを見せたので、三人はあたふたと逃げて行った。

ジンティを招いた友人は家の近くでドタバタと格闘する音が聞こえるから、外に出て様子を見ていた。ジンティがやってきたので、その友人は何が起こったのかをジンティに尋ねたが、ジンティはただ笑って、兵士が恨みを晴らしにやってきただけだと語った。そのときを最期にして、アンバラワでジンティと兵士のいざこざは二度と起こらなかった。[続く]

「クンタオ（16）」（2023年12月11日）

アンバラワに住むロウ・ジンティの名前はスマランにまで聞こえるようになった。アンバラワでベー・ビアウチョアンのアヘン販売代理人をしているチアム・ジュンタイが自分の一家の祝い事に大勢のひとを招いたとき、ビアウチョアンの代理人が祝儀を持って訪れた。

その馬車をベー・カンピンが護衛していた。そしてジュンタイの屋敷でジンティとカンピンが初めて会ったのである。ふたりは共に少林寺で少年時代を過ごした体験を持っていたことから、互いに親近感が高まったようだ。ふたりは親交を結んだ。

カンピンがアヘン馬車に乗ってアンバラワへ来ればジンティの家に泊まり、ジンティがスマランへ行ったときはカンピンの住んでいる寮に泊まった。ジンティがカンピンの寮に泊まりに来ると、アンバラワの拳豪と話をしたいカンピンの友人知人たちがたくさんやってきた。

ある時そんな座談の中で、悪徳華人金持ちの話題が出た。美女を見かければ未婚も既婚もおかないなしに手を出し、金の力で自分のベッドに横たわらせる。ところが飽きやすい性格をしているため、飽きたらさようならだ。

人妻の場合、金に目がくらんだ夫が一定期間妻を貸し出せばまた元の鞘に収まるかもしれないが、妻の方が金に目がくらんだ場合は夫がやくざ者の来訪を受けて手も足も出なくなり、妻が金持ち華人のベッドに喜んで横たわって金をねだりまくることになる。そうやってひと財産作るのが「女の戦略」なのだろう。

妻がさようならをされて家に戻って来た時にさまざまなケースが起こったことは想像に余りある。そのオプションのひとつとして、妻を許さないで家の外に蹴飛ばすような夫もいたにちがいあるまい。ひと財産作って自分の人生を自分の手で切り開いて行こうと考えて金持ち華人のベッドに上って行った人妻にとっては、夫に蹴飛ばされるのも当然の結末かもしれないが、それでも19世紀後半の世界中にあった世間というものはそんな女をまともな人間と認めなかったはずだ。

その時代の倫理観に即した依存性豊かな妻たちが夫から家の外に蹴飛ばされたら、女は路頭に迷うことになる。だがその悪徳華人は飽きた女をまた拾うようなことを決してしないから、まず間違いなく女の身に悲劇が生じただろう。結婚生活そのものに悲劇が起こり、そしてさらに妻の身に悲劇が起これはダブルパンチになる。

プダマラン地区に住むその悪徳華人ワン・チョッジュワンは半年ほど前に貧しい家の美しい娘に熱を上げ、妾に欲しいと言って親を大金でなびかせ、その娘を家に入れて数ヵ月間もてあそんだあと、今度は貧しいバッミ作り売り人ホー・アンキウンの美しい娘キムキョッに目が移った。

キムキョッが自分の第二妻になるよう骨を折れとチョッジュワンは衣裳や装身具などの巡回物売りをしている中年女に命じ、既に許婚者のいるキムキョッへの横車を押し始めた。結納金として500フローリン、そして妻の父に毎月20フローリンの手当てを出すという条件を付けたものの、アンキウンはその申し出を断った。娘には既に許婚者がおり、正妻の座を捨てて第二妻にするのは世間体がはばかられる。そもそも年齢の離れた夫を持って娘が楽しい日々を送れるはずがない。

キムキョッの許婚者に対しても、チョッジュワンは抜かりなく手を打った。100フローリンやるから許婚の約束をほごにしろと人を使ってアプローチさせたにもかかわらず、許婚者の若者も拒否した。それならば、とチョッジュワンは嘘の噂話を拡散させた。キムキョッは性的にふしだらなプレイガールであり、あの年齢でもう男を知っている。

しかし自分の知っているキムキョッがそんな娘じゃないことを確信している許婚者の若者はそんなデマにまったく動揺しなかった。それでもチョッジュワンにはまだまだ打つ手が残っている。アンキウンにも脅しをかけたが、怖がらない。そしてついに最後の手段が行われたのである。[続く]

「クンタオ（１７）」（2023年12月12日）

ある日、アンキウンの家に警察がやってきた。「おまえは贋札作りだという届け出があった。家の中を調べるから、住んでいる人間はすべて家の外に出ろ。」そして警察は家の中のベッドの下から贋札をプリントする器具類を発見したのである。アンキウンは逮捕されて留置場に入れられた。

アンバラワを管轄する監視官がアンキウンを取り調べた。贋札作りのための器具類は自分のものでないとアンキウンは否定したものの、「じゃあ、誰のものなのか？」と監視官に質問されてアンキウンは返事に困った。そんなことが答えられるはずがない。知らない間に置かれていたのだと答えたが、監視官の満足できる答えにはならなかった。「おまえは嘘をついている。」と言われて有罪にされ、300フローリンの罰金あるいは3カ月間の入獄という判決を下された。300フローリンもの金がアンキウンの一家にあるはずがなく、アンキウンは監獄に入る以外に道がなかった。

監獄に入った囚人たちは強制労働をさせられる。道路補修や道路の清掃が一般的な労働作業だ。道路作業している囚人たちの中にアンキウンの姿が混じるようになってもう二週間になる。

みんながチョッジュワンを悪しざまに言い、アンキウンの一家を助けてやりたいものだ、と口をそろえてジンティに物語った。チョッジュワンのような悪逆非道の人間には必ず天帝の罰が下るはずだが、罰が下るのを待っていればキムキョッが先に毒牙にかけられるかもしれない。アンキウンの一家を助けるのが先決だろう。

すると「両方同時にやってしまおう。チョッジュワンを懲らしめ、同時にアンキウンの一家を助けるのだ。」とジンティが言い出した。それをするのに早い方がいいから、今からだれかがわたしに同行してチョッジュワンの家を教えてほしい、とジンティは言う。更にまた、「どなたか potehi の人形を2体、買ってきてくれませんか。ひとつは水滸伝の宋江、もうひとつは虎をお願いします。」と頼んだ。

「じゃあ、それはわたしが今から買いに行きましょう。でも師匠、チョッジュワンの家で水滸伝を一席ぶってあいつを改心させるってのはちょっと無理でしょう。」と中のひとりが言い、満座が笑った。いや、これはただ

の小道具だとジンティは説明した。そして立ち上がると、チョッジュワンの家に案内してくれる者といっしょに寮を出て、人影のほとんど絶えた夜の道をプダマランに向かった。

ポテヒとは福建省泉州が発祥とされている中国人形劇「布袋戯」の福建語発音だ。福建文化が浸透した台湾でも同じ文字と発音が使われているとはいえ、決して台湾固有の伝統文化ではない。「たわむれ」の戯という漢字は日本で改造されたものであり、元々の中国文字は「トラカンムリ」の下が「豆」になっている。

ところが日本人の中にポテヒのヒに該当する文字「戯」を「劇」に置き換えた者がいたようだ。そのために中国人形劇ポテヒが日本語で布袋劇と書かれるケースが発生するようになった。それはそれで一向に差し支えないのだけれど、布袋劇は「ホテイゲキ」とだけ発音されるべきものであり、中国語名称のポテヒをその日本語の文字表現と結び付けるのは問題があるだろう。ポテヒという音は布袋戯だからそう発音されるのであって、布袋劇とは一致しない。布袋劇と書かれたならその福建語発音はポテキョッになってしまう。

そういう無理なことをするようになるのであれば、「戯」を「劇」に置き換えるようなことをせず、最初から布袋戯をそのまま日本語に摂りこんで「ホテイギ」あるいは「ポテヒ」と発音しておけばそれで済んだのではないかという気がわたしにはするのである。どうもやっていることが支離滅裂であるように思えてしかたない。

[続く]

「クンタオ（18）」（2023年12月13日）

インドネシア語ではこれを Wayang Potehi と呼んでいる。wayang とだけ書かれると皮で作られた薄板型の人形を使う影絵劇を指すのが普通だ。インドネシア語 bayang の語源がサンスクリット語の wayang であり、つまりインドネシア文化に影絵人形劇の芸能が生まれたとき、ワヤンという言葉がそれを示すために使われた。影という側面に焦点が当てられた結果をわれわれはその命名に見ることができるのではあるまいか。

ワヤン芸能はインドネシアのジャワ島で栄えたが、東南アジア諸国にも種々の形態の影絵劇 shadow play の伝統が作られていて、東南アジア全域に広まった影絵劇の源流はインドだったことを指摘している論説が少なくない。ラマヤナやマハバラタの原作に影絵芝居を示す言葉が使われているのだが、残念ながらワヤンという言葉ではなかった。ともあれ、ジャワ人があれこれとヒントを得た上で自分たちで創造し完成させた影絵人形劇の名称にサンスクリット語が使われた点にはうなずけるような気がする。

しかし現代インドネシア語におけるワヤンという言葉は影絵から離れて人形劇の方にシフトした趣があり、影を使わない木偶の人形芝居を wayang golek と呼び、人間が舞台で演じるものには wayang orang の名を与えるまでになった。ワヤンの語は既に bayang の意味から離れてしまい、演劇形式を指す術語として使われるようになったのである。劇を演じるのに使われるモノの名前と一緒に述べられてその様式のカテゴリーを伝える形に変化したことから、ワヤンゴレッやワヤンオランと同じように、影絵人形劇のワヤンは wayang kulit が現在の標準術語になっている。

ジンティは連れとふたりでチョッジュワンの家の前を通り、屋敷の構造や間取りを推し量った。表から見える位置にちょうどチョッジュワンが座っていたので、その顔もしっかりと覚えた。そうしてからふたりがカンピンの寮に戻ると、ジンティの計画を知りたくてうずうずしていたひとびとは誰一人家に帰らずにジンティが戻って来るのを待っていた。ポテヒ人形もすでに買ってきてある。

計画を話してくれと迫る一座に対してジンティはまず、決して世間にこの話を漏らさないことを約束してくださいと求めた。自分は姿を隠してそれを行なうのだから、行なった人間についての噂が世間に立てば、姿を隠して行った意味がなくなってしまう。一座は承服して、決してだれにも話さないと誓った。ジンティは計画を語り始めた。

ジンティは手品の術を使う計画を話した。ただし手品は現場の状況とその変化に対応して千変万化させなければ失敗するから、おおよその骨組みは計画しても詳細は行き当たりばったりにならざるをえない。だから詳しく計画を話したところでその通り自分が実行しないことも大いにありうるから、あまり意味がない。

とはいっても、これでは皆さんのご期待に添わないだろうから、わたしの手品の術をお目にかけましょう、と言ってから両手で顔を抑え、なにやら呪文を唱えた。

「それでは今からちょっとした手品を皆さんにお目にかけます。」とかれは言い、机の上に置かれている十個あまりの湯呑みをひとつひとつ空中に放り上げた。ところがその全部が空中で姿を消した。続いて机の上にあったヤカン、たらい、手ぬぐいなども同じ道をたどった。机の上は無一物になった。さらに一座のひとびとが身に着けてきた帽子・履物・襟巻きや羽織るものなどを手に取って空中に放り上げる。すべてが姿を消した。一座のひとびとをキツネにつままれたような思いが包んだ。一座の様子を見て取ったジンティは手を後ろに回し、空中のどこかから落ちてきたさっきの品物をひとつずつ受け取って、机の上に並べた。

次にかれは机の上の湯呑みを全部積み重ね、一枚の白い布を取り出すと積み重なった湯飲みを上から完全に覆った。そして湯飲みの山を覆っている白い布を上から押さえはじめたのだ。湯飲みの山は少しずつ崩れて高さが低くなっていく。そしてついに白い布は机の上に広がった。積み重ねられていたはずの湯飲みはかけらも残さず消えている。

机の上に広がっている白い布の中心をジンティは指でつまみ、今度はすこしずつ上に引き上げ始めた。布がゆっくりと上がって行く分だけ、布の内側に湯呑みが戻って来た感じがする。白い布が元の高さまで引き上げられると、ジンティは一気にその布をめくった。積み重ねられた湯呑みがそこにあった。[続く]

「クンタオ（１９）」（2023年12月14日）

それからジンティは立ち上がり、小部屋のひとつに入った。一分くらいしてから元の場所に戻ったかれは、持って来たロウソクに火を点け、口の中に入れた。その瞬間にジンティの口から火柱が1メートルくらい噴き出た。満座に拍手喝采が湧きおこった。

だがこの即興の手品ショーはまだ終わらない。買って来たばかりのポテヒ人形をかれはちょっと離れた小机に置いて立たせた。そして部屋中を明るく照らしていた何本もの大型ロウソクの火を消してまわり、ポテヒ

人形から一番遠い位置にある小さめのロウソクの灯りだけを残したのだ。部屋の中は薄暗い空間に変わった。薄明りの濃淡だけがその空間内にある物体を人間の目に認識させてくれる。物体が何であるのかはその輪郭を通してしか認識できない。

ジンティは一座のひとびとにポテヒ人形から離れて立つように言った。ひとびとがポテヒ人形の小机を遠巻きにすると、ジンティは護符を人形の上で焼き、人形に何かを語りかけた。そして自分もその小机から少し離れた場所に立って、手で人形に合図した。なんとその合図に応じて人形が動き始めたのである。まるで人形遣いが動かしているかのように、武将とトラの人形は闘いを演じ始めたのだ。

生命が宿ったふたつのポテヒ人形は闘いを続け、ジンティの合図でふたたびただの人形に戻った。ジンティはさっき消したロウソクの灯りをまた全部点けて部屋を明るくし、手品の後片付けをした。

かれが行って見せたそれらの手品の術は中国で大道手品師が行っている演技と本質的に同じものなのだ。ジンティはクンタオ修行の延長線上で大道芸人顔負けの芸を身に着けたと言えるだろう。時間が夜十時を過ぎたので、ジンティの手品を堪能して満足した一座は解散した。残ったジンティとカンピンの間でジンティがこれからしようとしていることが詳細に検討され、両者の知恵がしっかりとかみ合わさった計画が完成した。ふたりはその結果に満足した。

夜中の1時ごろ、黒装束に身を包んだジンティが寮の表に出てきた。ポテヒ人形2体もポケットに入っている。カンピンは同行しない。ジンティひとりで十分にやれる仕事であり、二人連れで行動すればそれだけ人の目に触れる確率が高まるからだ。

チョッジュワンの家の脇まで来た黒い影は、周囲の様子を見回してから塀の上に跳び上がって屋敷の中に消えた。邸内は寝静まっている。家屋の中央広間の大きい灯火を小さくしてから、屋敷内の全員が深い眠りに落ちるようにジンティは呪文を唱えた。それから足音をしのばせてこの屋敷の主の寝室を探す。チョッジュワンはひとりで寝室に寝ていた。妻は別の部屋で子供たちと寝ているようだ。ジンティにはその方が好都合だった。

室内の灯りを吹き消すとジンティはポテヒ人形を寝台の前の机に置き、チョッジュワンの意識だけを覚醒させた。肉体は眠ったままだからチョッジュワンは逃げたり騒いだりしない。チョッジュワンは夢うつつの中で机の上のポテヒ人形が闘いを演じている様子を見た。動かしている人間の姿はなく、人形が自分で動いているのだ。まるで夢の中の世界のように。しばらく時間が経過してから、ジンティはチョッジュワンの意識をまた眠らせた。

次に、部屋の中に置かれている木製のタンスをかれは開いた。鍵がかかっていても手品の達人にそんなものは何の役にも立たない。タンスの中に置かれている衣服の山をどけると、その下に紙幣や銀貨が大量に隠されていた。ジンティは紙幣の束から10フローリン札40枚を抜き取ってポケットに入れてから、さっきどけた衣服の山をまた元通りにチョッジュワンの全財産の上に積み重ねてタンスの鍵を閉めた。

そのあとジンティは持って来た手紙を小型ナイフで壁に貼り、そのまま静かに屋敷を出てカンピンの寮に帰って行った。

翌朝目覚めたチョッジュワンの驚きは並大抵のものでなかった。机の上にはポテヒ人形がふたつ立っていて、夢の中に現れたのがどうもそれのような気がする。おまけに壁にはナイフで手紙が突き立てられている。急いで起き上がると、チョッジュワンは壁の手紙を引きはがして読んだ。達筆の中国語で書かれたその手紙の内容はおよそこんなものだった。

［ 続く ］

「クンタオ（20）」（2023年12月15日）

ワン・チョッジュワン先生

稔り豊かな金持ちになれば同胞に恵みを与えるのが人間の道であるというのに、汝は女色に狂って金を悪事にばかり使っている。天帝はすべてお見通しであり、罰が汝に下る日は近い。

我は汝に警告を与えるために来た。天罰が汝に下る前に改心せよ。汝がこれまでに虐げた者のだれがいつ汝に刃を向けるか、それは天帝だけがご存知だ。我にも汝の耳や鼻をそぎ落として罰を与えることがいつでも行える。昨夜に我がそれを行なえば、今ごろ汝は形の変わった自分の顔を見て、泣いていることだろう。

汝がホー・アンキウンの娘を手に入れたいためにその父親を虐げていることを世間のだれもが知っている。今すぐにそれをやめなければ、汝は一生後悔することになる。我は汝のタンスから4百フローリンだけ取った。それは我自身のためでなく、汝が虐げた者のためにしたことだ。我は泥棒ではない。もし泥棒なら、汝の全財産はもうタンスから姿を消しているはずだ。これは汝への警告なのだ。

汝はスマランの華人社会に不穏をもたらしている虎である。女たちから平穏な暮らしを奪い、不幸をもたらす虎なのだ。虎は宋江に退治される運命にある。汝はその様子をもう夢の中に見た。汝がこれまでの振舞いを悔い、心を入れ替えて精進するなら、天帝の罰は下るまい。だが改心しないなら、汝は我を敵にすることになる。

天帝は汝を見ている。改心し、慎み、善を施せ。さもなければ、汝は我を警告者でなく、敵対者として迎えることになる。

三斑点より

手紙を読み終えたチョッジュワンは震え上がった。タンスを調べたところ、鍵は普通にかかっているし、どこかをこじ開けた形跡もない。だが手紙に書かれている通り、紙幣が40枚抜き取られている。他にも銀貨やダイヤなどの宝石も置いてあったのだが、他のものにはまったく手が付けられておらず、手紙の内容が真実であるのは疑う余地がないことをチョッジュワンは確信した。

かれは警察に届け出て三斑点と名乗る盗賊を捕まえてもらおうと思ったのだが、考え直した。警察に訴えれば事件の背景が洗い出されてこれまでの悪事を公開することになるだろう。このできごとは妻にも知らせないほうがよい。かれはポテヒ人形と手紙をポケットに隠した。

だがしかし、キムキョッを手に入れるための段取りはもうホームストレッチに差し掛かっているのだ。邪魔だてをするアンキウンは既に監獄に送り込んだ。あとはキムキョッの母親をうなずかせれば美しいキムキョッが自分のものになる。あの母親は怖がりの女だから、夫が外国に島流しになると言って脅かせば震え上がって助力を求めて来るだろう。そこでわしが助け舟を出す。その交換条件がキムキョッの身柄だ。

そこまでこの企画を進めて来てあともう一歩というところなのに、また別の邪魔者が現れた。ここまで段取りを進めるのにたいへんな大金を使っている。いまやめたらあの大金が無駄になってしまう。だが三斑点と名乗る正体不明の怪人は侮れない男のようだ。こやつがわしに危害を加えないようにしてキムキョッを手に入れる妙案はないだろうか？チョッジュワンはその対策探しに没頭した。しかし考えても考えても妙案は浮かんでこない。

こんなときは気分を変えるに限る、と考えてチョッジュワンはロンボッ小路に向かった。ロンボッ小路にはかれの別宅があり、妾のひとりがその家の主人になっている。そこへ行ってゴロゴロしていると、クンチュンというニックネームで呼ばれているかれの手下がやってきた。[続く]

「クンタオ（２１）」（2023年12月18日）

クンチュンは親分のチョッジュワンからさまざまな用事を言い付けられ、その用事を行なう都度、親分から金をもらうという立場の手下になっている。雇用関係ではないから、定期的に給料をもらっているわけではない。時には親分と無関係に金稼ぎの仕事もするから、ひたすら親分に仕えているわけでもない。

チョッジュワンのキムキョッ奪取作戦では、クンチュンが現場の手足として働いて大きい功績を作り出している。アンキウンの家に贋札作り器具をひそかに置く手配をしたのがこのクンチュンだった。クンチュンはアンキウンと顔なじみでときどきかれの家を訪れることもある。クンチュンがアンキウンの下働きの者に5フローリン与えて贋札の器具類をベッドの下に置かせたのだ。そしてその仕事の成功報酬として30フローリンを

チョッジュワンからもらっている。

朝早くから親分が別宅にいるのに驚いたが、キムキョップロジェクトの最後の詰めを早くやりましょうと言ってクンチュンはチョッジュワンに迫った。それをやればまた褒美がもらえるのだから。

ところがチョッジュワンは「ちょっと待て」と言う。あれほど熱を入れて進めてきたこのプロジェクトにチョッジュワンがまるで逆方向の風向きを示したことがクンチュンを驚かせた。いったいどうしたことかと根掘り葉掘り尋ねるクンチュンに隠しおおせる術もなく、チョッジュワンは昨夜のできごとを物語り、ポケットからポテヒ人形と手紙をクンチュンに見せた。手紙を読んだクンチュンは大笑いした。

「こんなものはただの口脅かしに決まっている。親分がこんなものを怖がっちゃいけない。一度プロジェクトを始めたら最後までやり通さなければ親分の顔が立たないでしょう。こんな賊の侵入は、不寝番の見張りを置くだけでもう二度と起こりませんぜ。」

クンチュンのアドバイスに気分がほぐれたチョッジュワンは、さっそく見張り番の手配をクンチュンに命じて資金を渡した。クンチュンはまだしばらく親分とあれこれお楽しみ分野の話をしてから、言い付けられた用事を片付けるために出て行った。

時間は前後して6時間ほど前の夜中、チョッジュワンの邸宅で仕事を済ませたジンティがカンピンの寮に戻って来ると、カンピンはまだ眠らないで親友の帰りを待っていた。「仕事が速すぎるんじゃないか？」とカンピンが声をかけるとジンティが答えた。「とりあえずはこんなものでいいだろう。チョッジュワンの肝は半分くらい縮んだはずだ。あいつの金をこれだけ取ってきた。これでアンキウンを監獄から出そうと思う。」

カンピンはジンティの考えに賛成した。しかしチョッジュワンへの懲らしめはまだまだ手ぬるいのではないだろうか。あの執念深い金持ちが一回くらい脅かされたところで改心するとは思えない、とカンピンは忠告する。ジンティはうなずいた。では明晩、第二回戦を行なおう。

次の夜、深夜12時ごろ、ジンティは普通の服を着て出かけた。チョッジュワン邸の前には見張り番がふたり立っている。ジンティはきょろきょろせずに前を見て黙々と歩き、チョッジュワン邸を通り過ぎて少し先の小路に入った。そして一軒の家屋の屋根に跳び上がり、そこから屋根伝いにチョッジュワン邸の屋根までやってきて、屋敷内の人間の眠りが深まるように呪文を唱えた。

邸内に入ったものの、チョッジュワンの寝室には中から鍵がかけられている。だが手品の達人に開けられない鍵はないのだ。ジンティは寝室内のタンスの鍵を開いて衣服を全部取り出し、机の上に置いてかき混ぜた。つぎに金銭宝石類も全部取り出して別の机の上に置き、タンスをまた閉めて鍵をかけた。

続いてその部屋にある紙と筆で手紙を書き、台所へ行って一番鋭利な包丁と鉈をひとつずつ持って寝室に戻ると、壁に包丁を突き立てて手紙を貼り付け、鉈は紐で縛って寝台の中央に当たる位置に天井から吊るした。それがジンティの第二回戦だった。[続く]

「クンタオ（22）」（2023年12月19日）

翌朝目覚めたチョッジュワンは、空中に浮かんでいる見慣れない物体が開いた目に最初に飛び込んで来たのでそれを注視した。それが鉈であることに気付いたとき、かれは慌てて寝台から転がり出た。そして室内を眺め渡し、また謎の怪人がやってきたことを知って戦慄した。すぐに壁に貼られた手紙をはがして読む。

「汝は石頭で自分の欲望を達成するまで容易に屈しないことを我はよく知っているから、もう一度警告を与えるために来た。これが最後の警告と思え。汝がアンキウンの娘を手に入れようとする動きを少しでも起こしたなら、汝は我の敵になる。我が汝の全財産を取り上げれば汝が一夜にして貧乏人になることも起こり得るし、我が汝の鼻や耳をそぎ落とせば汝は生涯の悔いを抱えて余生を送ることになる。改心せよ。三斑点」

というような内容がそこに書かれていた。

チョッジュワンはこれも妻に内緒にしておこうと考えて手紙をポケットに入れ、室内を自分で片付けてから包丁と鉈を台所に持って行った。朝食を済ませると、クンチュンに相談するためにロンボッ小路の別宅へ行った。クンチュンは先に別宅にやってきて親分を待っていた。キムキョップロジェクトの最終ステップを親分に決意させるためだ。

最終ステップのスタートを迫るクンチュンにチョッジュワンは眉をしかめた。賊がまた寝室に侵入したことをお前は知らないのだ、と言ってチョッジュワンは一部始終を物語り、手紙を示した。クンチュンが勧めた見張り番など何の役にも立たなかった。

「頭家、こいつはクンタオ師ですぜ。」と手紙を読んだクンチュンが言う。「わしもそう思った。」とチョッジュワンも言う。続いてクンチュンが出したアイデアは、別のクンタオ師を雇ってチョッジュワンの寝室を警護させ、同時にチョッジュワンに刃向かって来る怪人が誰かを見つけることだった。なるほど、それで問題の根を絶つことができる。チョッジュワンはクンチュンのアイデアを買った。(イ__ア語になった tauke 頭家は雇い主あるいはボスを意味している。)

誰を雇えばよいだろうか？クンチュンはアンバラワに住み着いた新客のクンタオ師、ロウ・ジンティを勧めた。スマランに住んでいるクンタオ師を雇ったら、そいつが怪人三斑点かもしれないではないか。ジンティはクンタオの腕も優れている上に頭も良いそうだ。ジンティに捜査させれば三斑点の正体も暴くことができるだろう。

「ジンティを食客にして寝食丸抱えにし、手当ても別に出そう。仕事はわしの身辺警護だけをすればよい。他の義務は何もない。この条件で話をして来い。」とチョッジュワンはクンチュンに命じ、アンバラワへの全経費と仕事の報酬として10フローリンをクンチュンに渡した。クンチュンは「明日か明後日にはアンバラワへ出発します。」と答えた。

一方、ジンティは4百フローリンの金をどのようにアンキウンの妻に渡すかについてカンピンと相談した。3

百フローリンは裁判所への罰金に使い、それを払ってアンキウンを監獄から出させるための金だ。1百フローリンは出獄したアンキウンがバッミ作り売りの仕事を再開するための資金として使う。その意図をアンキウンの妻に正しく理解させなければ、その目的が達成されずに違うことが起こるかもしれない。

だから、金をアンキウンの家に投げ込んだだけではどんな結果になるか分からない。妻は怖がってその金を警察に差し出すかもしれないではないか。かと言って、誰かを使って上述の口上をアンキウンの妻に伝えさせ、金を届けるようなことをすれば、三斑点の正体が世間に漏れてしまうだろう。

「じゃあ、われわれふたりでやるしかないわけだ。」とジンティが言うと、カンピンが否定した。「いや、わたしは顔を出すことができない。アンキウンの妻はわたしを知ってるんだから。そんな大金を持っているはずのないアヘン馬車の用心棒がその金をどうしたのか、そんな詮索をされたらわたしはスマランに住めなくなってしまう。」ということでジンティが自分で届けざるを得なくなった。

自分はまだムラユ語がうまく話せないとジンティが言うとカンピンが、アンキウンの妻は福建語をとても上手に話すから大丈夫だ、と言ってジンティを納得させた。[続く]

「クンタオ（23）」（2023年12月20日）

翌早朝のまだ薄暗い時間に、ジンティとカンピンはアンキウンの家がある地区にやってきて、カンピンは地区のはずれでジンティを待つことにした。ジンティがひとりだけでアンキウンの家の前に立って表戸を叩いた。戸が開いて50代の女性が顔を出した。

自分はアンキウンの古い友達で、アンキウンが奸計で牢獄に入れられたことを聞いて助けに来た。4百フローリンの金が封筒に入っているから、罰金に3百使い、残りは商売を再開するための資金にするように。

その女性は朗報を耳にして歓喜の叫び声を揚げそうになり、それを抑えて相好を崩した。と見えたのも束の間、続いて感動のために泣き顔になった。「名前を教えてください。」と頼まれたジンティは、封筒の中に手

紙が入っていて、そこに自分の名前もすべてのいきさつも書いてあるから、アンキウンが読めばわかる、と言って早々にアンキウンの妻の前から立ち去った。その手紙はアンキウンが読む前に他人に絶対見せてはいけない、という念押しも忘れなかった。

そのようにしてジンティはスマランでの人助けの仕事を終えると、カンピンの寮を去ってアンバラワに戻った。カンピンの寮のある地域を管轄している地区役人の家へ行って通行パスの手続きを行い、それから郵便馬車の駅へ行ってアンバラワを通る馬車に乗ったのである。

アンキウンの妻は太陽が少し上に昇るまで落ち着かない様子で待っていたが、待ちきれなくなったらしくよそ行きに着替え始めた。キムキョッが母親に言う。

「母さん、こんな早い時間にどこへ行くの？」

「この罰金を裁判所に納めてもらうよう地区役人に頼みに行くのよ。」

「こんな早い時間には地区役人の家でもまだ事務手続きを始めてないでしょう。」

「でも母さんはとても家で待っていられないから、地区役人にお願いしてきます。」

そう言って封筒の中の金を30枚取り出し、それをポケットに入れて出かけた。

地区役人のソウ・ティアムヨンは自邸の表に立って路上の往来を眺めていた。アンキウンの妻がやってきて、罰金を渡すから夫の出獄手続きをお願いしますと言い、3百フローリンをソウの手に渡した。ソウは慈父の面持ちを示して「分った、奥さん。できるだけ早くご主人が家に戻れるようにする。地区警察役場が開いたら、すぐに手続きに行きますから。」とアンキウンの妻に約束した。ところでこのお金はどうしたのですかと尋ねたから、アンキウンの妻は今朝の日の出前に起こったできごとをかいつまんで話した。それが世間に、旧友に救われたホー・アンキウンの幸運譚として語り伝えられることになった。

その日の正午すぎ、アンキウンが自宅に帰って来た。妻と娘は抱き付いてかれを迎えた。感動が静まったころにアンキウンが妻に尋ねた。いったいどうやって罰金を納めたのか？妻はその日未明のできごとを夫

に語り、ジンティの手紙を夫に見せた。その手紙を読んだアンキウンが「これはわしの知らないお人だ。」と言い出したから、妻と娘は怪訝な表情で顔を見合わせた。

手紙の中には4百フローリンの素性と三斑点と名乗る怪人がワン・チョッジュワンに対して行ったことが説明されていて、アンキウンの一家は自分の庇護下にあるからもうチョッジュワンを恐れる必要はないといったことが書かれてある。しかも手紙の主の名前は明記されておらず、世を憂う者という言葉で示されているだけだ。善行の対価をまったく求めようとしないこの陰徳者に一家三人は感謝の祈りを捧げた。

更に、キムキョッと許婚者のビンリアンを早く結婚させ、保護者を作っておけば変な毒虫が寄って来ても対処しやすいだろうということで意見が一致し、早々にふたりの結婚式が行われることになった。[続く]

「クンタオ（24）」（2023年12月21日）

さて、親分に敵対する正体不明の犯人から親分を警護する依頼を携えて、クンチュンはジンティの住むアンバラワに向かおうとしている。それが犯人捜査を犯人に頼むことになるとは露知らないで。

クンチュンは、馬を飼っている隣人から馬を借りた。このプリブミの隣人には何か土産物を買ってくればそれで済む。チョッジュワンには郵便馬車を使ったことにして、もらった10フローリンはなるべく経費を減らして自分の懐に残したい。

この時代、オランダ東インドに住む華人系の者は目的が何であれ、自分の居所から離れる場合に通行パスを作ってそれを目的地の役人に届け出なければならなかった。目的地が2ヵ所3カ所になれば必然的にパスも2枚3枚と必要になる。もちろん道中で検問を受けることも大いにあり得るし、検問されたときにパスを持っていなければ犯罪者として扱われることになる。この犯罪には罰金10フローリンが科された。

1816年に開始されたこの passenstelsel と呼ばれる通行許可証制度は華人系とアラブ系のオランダ東イ

ンド住民に適用された。この制度が廃止されたのは1916年だ。通行パスは本人の居住地を管轄する地区役人に申請し、パスが交付されるのは翌日になる。申請には居所を離れる目的や旅に使う乗り物などを申し出なければならず、そして交付手数料が0．5フローリンかかった。

本編で地区役人と書いているのはオランダ語の wijkmeester のことで、華人コミュニティでは華人系住民のひとりがその職に就いた。役所などは設けられず、役人は自宅で事務手続きを行ったから、住民は諸手続きのために地区役人の家を訪れるのが普通だった。

クンチュンはチョッジュワンから仕事を言い付けられた日にパスを申請し、翌日パスを手に入れ、そしてその次の日の早朝にスマランを発って南下し、ウガランの山地に向かった。大きめのチャピンを被って背に傘を背負い、布袋に着替えなどを詰めて馬の背に置く。その時代の旅行者のいでたちはたいていそんなものだった。チャピンというのはジャワの農民が被る円錐形の竹編み笠だ。

昼頃にとある村に達して、馬に餌を与えてくれる食事ワルンを探し、そこで1時間ほどゆっくりした。そしてまた出発し、アンバラワに着いたのは日もとっぷりと暮れた夜8時ごろ。クンタオ師の家を訪れるのは翌日にして、クンチュンは馬の世話も同時にしてくれる宿を探した。

この時代、田舎町に綺麗で快適な宿屋などは存在しない。ヨーロッパ人であれ、華人であれ、プリブミであれ、そんな町を訪れたらみんな友人知己の家に泊まるのが普通だった。東インド行政府の人間であれば、郵便馬車の駅にある宿泊施設を使うことができた。民間人はそこに泊まることができない。

泊めてくれる地元民のいない行商人や流浪の人間が、宿屋も行っている飯屋ワルンに泊まった。この宿屋兼業の飯屋ワルンは表がバレになっていて何人もがそこで雑魚寝できる。個室を望む客は奥の竹編み壁の個室に入ることもできた。持っている荷物に万一のことが起きるのを心配するひとがたいてい個室を使うほうを選択した。しかし行商人たちは滅多に個室を使わなかった。個室を使えば10セントかかるものの、たいていみんな雑魚寝して2セントで済ますのが普通だったのである。クンチュンは個室に泊まった。かれは10フローリンという大金を隠し持っていたのだから。

翌日、太陽が高くなったころを見計らってクンチュンはプチナンにあるジンティの家を訪れた。もちろん、お互いに初対面であり、相手を見かけたことさえない。アンバラワの高名なクンタオ師匠の名前はスマランにも鳴り響いており、自分の頭家がぜひお近づきになりたいと望んでいて邸宅にご招待したいと言っているのを伝えに来ました、とクンチュンが来訪の用向きを告げた。

その頭家がワン・チョッジュワンであることを聞いて内心驚いたがジンティはそんなことをおくびにも出さず、高名な分限者のワン先生のお目に止まって光栄だと言い、自分と親しくなりたいのはどういう意図で言い出されたことか教えてほしい、とクンチュンに尋ねた。するとクンチュンは身辺警護をお願いしたいのだと言う。

[続く]

「クンタオ（25）」（2023年12月22日）

「スマランはそんな危険な町ではないでしょう。スマランの華人社会の頂点にいるマヨールのベー・ビアウチョアンをはじめ、ウイ・チーシン、ウイ・ティオンハム、テー・インチャンなどのお歴々の誰一人としてガードマンを連れ歩いているひとはいない。これは何か特別な訳がおありなのかな？」

クンチュンは親分の悪事が漏れかねない話をしたくなかったが、ジンティにそう出て来られると怪人三斑点のできごとに触れざるを得ない。それで泥棒が鍵のかかっている寝室に入って鍵のかかっているタンスから金を盗み取った。並の泥棒ではないので並の人間に警護させても防ぐのはむつかしいだろう。だから高名なクンタオ師匠にぜひお願いしたいと思っているのです、と語った。

ジンティがツッコミを入れた。その泥棒は全財産を盗んで行ったのですか？だったらもうやって来ないでしょう。

「いや、盗まれたのはその一部で、まだたくさん残っているから警護をお願いしたいのです。」

「そりゃ変な話だ。鍵のかかった寝室に入り、鍵のかかったタンスから全財産の一部だけを盗む泥棒？泥棒がすることとは思えない。おたくの頭家とその泥棒の間にはもっと違う問題が絡んでいるのではありませんか？そんな凄腕の泥棒なら、スマランには高い地位の大金持ちがたくさんいるから泥棒稼ぎには困らない。だからたくさんの金持ちの家で事件が起こり、みんな警備を厳重にして当然となるはずのところ、その泥棒はおたくの頭家だけを狙って入ったように思われる。そいつは泥棒ではないんじゃありませんかな。」

クンチュンは切羽詰まった。かれは話の方向を変えた。

「確かにそれはただの泥棒でなく、何かの意趣を含んで行われたものかもしれません。しかし頭家にはその人間の心当たりがまったくありません。なのでぜひ師匠にご出馬いただいて、この人間が何者なのかをつきとめていただきたいのです。」

ジンティはやってきたクンチュンがただのメッセンジャーでなく、親分に忠誠を尽くし親分のために執念深く与えられた仕事を完遂させようとする、まるでうなぎのようにつかまえどころのない知恵と性格の人間であることに舌を巻いた。

よからぬ願望を抱く悪人が悪知恵を持つ手足を得れば、悪の願望が世に実現して善人が泣きを見ることになる。悪知恵を持つ手足にも喝を与えなければならない。ジンティはクンチュンに諭した。

その人間はおたくの頭家の悪事を見かねて、義侠心に駆られてそんなことをした可能性がある。そのようなすごい腕を持つ人間は滅多に自分の腕を見せびらかすようなことをしない。ということはおたくの頭家の悪事も滅多にないレベルのものだったにちがいあるまい。大勢の人間を泣かせるようなことをしているのではないだろうか。だからあなたが泥棒と言っているその人間はおたくの頭家に反省を求め、悪事に走ろうとする自分の心をもっと強く制御させるための忠告を与えようとしたのではないかとわたしには思われる。

世の中で正しいことを行って人生を送るのが人間の務めであるはずだ。だからたくさんできた金を世間の人間を泣かせるために使うような人間がいれば、人間はお互いに注意勧告し合って間違った行為をなくすようにしなければいけない。ところが金の力は人間を狂わせてしまう。悪い人間が金をくれるために、悪い人間の願望を実現させようとして手助けする人間が集まって来る。わたしにはそんな人間のひとりになる気が毛頭ないので、おたくの頭家のお役に立つことはできない。

そう言われて手ぶらでスマランに帰れば、親分は自分を役立たずと見なして仕事をくれなくなるかもしれない。重用されている手下としての自分の立場を維持するために、クンチュンはもう一押しせざるを得なかった。

「実は師匠、これにはこんなわけがあるんですよ。でもこれは決して誰にもしゃべらないでくださいよ。師匠の親友にも内緒にしてください。」と言ってクンチュンはキムキョップロジェクトの説明をし始めたのである。

[続く]

「クンタオ（26）」（2023年12月27日）

話しを聞き終えたジンティは「その話の中に答えがもう出ているでしょう。」とクンチュンに言った。おたくの頭家がそんな不品行を止めれば済むだけの話ではないだろうか。にもかかわらず、四六時中警護してくれと言うのは止める気がないと語っているのと同じことになる。そんなことをすれば謎の人物がまた寝室に出現して今度は耳や鼻をそぎ落すかもしれない。わたしにその謎の人物と闘ってほしい？わたしはきっとその謎の人物の側に着くでしょう。そんなわたしにおたくの頭家の警護などできるわけがない。

正しい道を歩んで生きていく者には警護などまったく必要ない。敵を作らないからだ。金を使って他人を泣かせているかぎり、数限りない敵が出現しておちおち眠っていられなくなるだろう。あなたも頭家の悪事に手を貸すのでなく、頭家が善人になるように骨を折ったらどうですか？

用心棒をリクルートしに来たはずが、まるで意見されに来たような結果になってしまった。ジンティには応じる気配がまったく見られない。クンチュンは諦めてジンティの家を辞した。ジンティの家からそのままアンバラワのレッナンチナの家を訪れて通行証にサインしてもらい、宿屋に戻って馬を引き出し、スマランへの帰途

に就いた。

仕事がうまく行かなかったのだからご機嫌斜めだ。早くスマランに戻ろうとして馬を急がせた。昼頃にバウェンに着いて馬に餌を与えてくれるワルンを探し、自分も食事して半時間くらい休んだ。

ふたたび出発して山道を北上する。だいぶ進んで人気のない平原まで来たとき、怪しいプリブミがふたり、クンチュンの行く手をさえぎった。悪い予感がクンチュンを襲った。クンチュンは他の旅人がそこを通りかかるのを心底から願った。しかし期待に反してだれも通りかからない。

ひとりが馬を抑えてクンチュンに言う。「ジュラガン、朝から食ってねえんだ。1ルピア恵んでくだせえ。」ジュラガンとは華人にとっての頭家と同じような意味だ。プリブミはフローリンのことをルピアと呼んでいた。つまり銀貨を1個くれと言っているのだ。

「わしゃジュラガンじゃなくて使い走りの人間だ。金は持ってないよ。」

「嘘だ。馬で旅する人間が金を持ってねえはずがねえ。」

「でも金は持ってないんだ。」

「早く金を出せ。さもなきゃ、俺たちが自分で探す。」

クンチュンが動きを示さないので、もうひとりがいきなりクンチュンの足を引っ張った。クンチュンは馬から転げ落ちて背中を地面にぶつけた。「助けてくれ。強盗だ。」と大声で叫ぶが、そこにやって来る人間はひとりもいない。

地面に横たわったクンチュンの喉にひとりが手をかけて軽く絞め、もうひとりが服のポケットをまさぐる。ポケットにあったのは少額コインが数セント分だけ。バウェンのワルンでもらった釣銭だ。賊はさらに手を緩めず、服の下を探って胴巻きを見つけた。胴巻きの中には18フローリン入っていた。それを手にして顔をほころばせたふたりのプリブミは街道脇を埋めている丈高いススキの群生の中に駆け込んで姿を消した。

クンチュンは痛めた背中をさすりながら馬に乗り、歩を速めさせてウガランに向かった。ウガランにはチョッジュワンの友人である分限者のコウ・チンキアンが住んでいる。クンチュンはチンキアンの家を訪れてついさっき起こった事件を物語り、旅費としてなにがしかを恵んでほしい、と頼んだ。同情したチンキアンはクンチュンに1フローリンを与えた。ところでアンバラワへは何をしに行ったのかと尋ねられてクンチュンは、病気の親戚を見舞いに行ったと嘘をついた。

クンチュンは夜の8時にやっと自宅に戻り、自分の妻に道中で起こった事件を語って聞かせた。あわや二度とここに戻って来られないことになりそうだったが、勇気を奮い起こして賊と戦い、なんとか戻って来ることができた、と脚色した。[続く]

「クンタオ（27）」（2023年12月28日）

翌日クンチュンはロンボッ小路に行って親分に出張報告をした。ジンティというクンタオ師は楽をして金を得ることが嫌いで、苦労して得たわずかな金で生きていくのを好む貧乏根性の愚かな小人だとその人物評を親分に語り、親分の身辺警護を頼むには値しないという説明をしてチョッジュワンを同意させた。チョッジュワンもそれでは仕方がないなと納得した。このふたりは金銭に関わる処世哲学がよほど一致していたのだろう。

続いてクンチュンは帰途に起こった強盗事件を親分に語り聞かせ、もっと大げさな脚色を加えて自分の活躍を物語った。4人の屈強な盗賊が出現し、そのうち2人は自分が倒したものの、後ろから襲われて自分も倒され、アンバラワ行きの費用としてもらった10フローリンを奪われてしまった。そう語って背中の青あざを親分に示したからチョッジュワンも同情し、奪われた10フローリンを補填してやり、さらに慰労のために5フローリンをクンチュンに与えた。

それはともかくとして、チョッジュワンは結婚したキムキョッを諦めてそのプロジェクトを放棄したから、怪人三斑点の企ては完全な成功を収めた。謎の怪人の出現は二度と起こらなかったのである。

チョッジュワンは改心したのだろうか？どうもそうではなかったらしいが、終に金の力がふるえない立場に陥ってしまった。事業に失敗して、全財産が人手に渡ってしまったそうだ。悪知恵を持つ手足も頭家を替えることになったのではあるまいか。

さてジンティはアンバラワでの暮らしを数年間続けてから、ウォノソボに住む友人に誘われて居所をウォノソボに移した。そこでもクンタオを教え、また医者の仕事もしたから、弟子や友人知人がすぐに増えた。

かれは昔から独身生活をしてきたので、自分で粥を作り、湯を沸かして茶を淹れるようなことを平然と行っていたが、ウォノソボの友人たちがそれを見かねて妻を持つように勧めた。しかしジンティは、妻のいる生活というのは自分に縁のないものと考えている、と言ってみんなの勧めに従おうとしなかった。

あるときジンティが病気になり、起き上がることのできない日が続いたため、友人たちが年寄りの女性を雇ってジンティの世話をさせた。ところがそのうちに、お手伝い女性が自分の用事を優先してジンティの世話に来たり来なかったりするようになったため、その女性をやめて自分たちが交替でジンティの家へ行って飲食の用意をしたり看病するようになった。自分の家で粥を作って持って行く者もいた。

それにはジンティも困り果て、ついに妻を持つことに同意した。どうやらジンティは妻を持つということを性生活や子孫を作るという目的に結び付けず、家庭内の諸事万端を司り、また夫の公的生活を後ろから補佐する執事という役割に限定したようだ。友人たちもジンティの意思を了解し、その役割にふさわしい女性を見つけてジンティと娶せた。

しっかりした性質のしつけのよくできた娘で、一度結婚したが後家になって実家に戻った女性がジンティの妻になった。ジンティの意思を了承して再婚する決心をしたこの女性がある縁起の良い日にジンティの家に連れて来られ、結婚式の通知など一切世間に出さないで、友人一同が集まってその結婚を祝福しただけだった。

ジンティの妻は下働きの娘を使ったから、男の一人暮らしだった家の中がふたりの女性によっていきなり明るくなった。またジンティは跡継として男の子を養子にしたのだが、幼いうちに病死してしまった。[続く]

「クンタオ（28）」（2023年12月29日）

ジンティはウォノソボで、中部ジャワのあちこちで活躍している華人の貴顕たちと知り合い、みんなに好かれた。クンタオの達人でありながら腰が低く、他人に不快感を与えないように実に自然に振舞うことのできる人間性が好まれたのだ。そんなひとびとがジンティを自邸に招いて何日も滞在するように勧めた。トゥマングン、バトゥル、マグラン、パラカンなど、近隣のほとんどの町をかれは訪れた。

しかしウォノソボでの暮らしはあまり長く続かず、ジンティはそのあとパラカンに移り住んで、その町で1921年に没した。享年66歳だった。

このパラカンの町は Parakan と綴られてインドネシア語でパラカンと発音されるが、ジャワ語では/k/が子音でなく声門閉鎖音のシンボルとして使われていて、パラ’アンと発音されている。

ムラユ語に摂りこまれたアラブ語源の単語も、アラブ語のハムザ（声門閉鎖音）が/k/の文字で表記されたために無声になるのが正式な発音だった。だから rakyat の/k/は音がないのが正式発音だったのだが、現代インドネシア人はもうそんな区別をしなくなっているように見える。

ともあれ、インドネシア語文の中に Parakan という地名が出て来ると非ジャワ人はそれをまず例外なくパラカンと読む。ところが、ジャワ人の中にはそれを固有名詞と捉えてジャワ語の原語発音通りにパラ’アンと読む人も出現する。正解が常にひとつとは限らないという現象がここにも出現するのである。

このパラカンのエリアは古マタラム王国時代に聖域とされ、チャンディや祭祀場を世話させるために住民に下げ渡された土地だったようだ。現在のパラカンという名称の由来はイエーメンから来たイスラム師 Kyai Parak なのだそうだから、ヒンドゥ＝ブッダ時代は違う地名になっていたのだろう。

ディポヌゴロ戦争が終わったときに反乱軍兵士の多くがこの地方に身を隠したという話がある。多分それ

は事実だったように思われる。なぜなら、オランダ東インド政庁が反乱の気分を骨抜きにするために、アヘンをこの地方に蔓延させて住民を中毒者にすることに格別な骨折りをしたと言われているのだ。

華人がこの町にたくさん住むようになったために、中国寺院 Hok Tek Tong 福徳堂が１８４０年に建設された。その後も華人コミュニティがどんどん大きくなってジャワ島で中華文化の雰囲気が濃厚な町になり、いまでは東のラスム Lasem と西のこのパラカンがジャワ島の中華タウンとして双璧をなしている。

ジャワ島中部地方で、クンタオ師の頂点グループのひとりとして名前を高めたジンティは、パラカンでも道場を開いてクンタオを懇切丁寧に教えた。かれの指導は、人間の力というものの物理的な原理を分析して合理性を持たせたものになっていたこと、弟子の体格や身体的特徴に応じて本人のもっとも役に立つクンタオ技術を教えたことなどがその骨子になっていたため、基礎体力を付けさせる時期が過ぎたあとの弟子の進歩には目覚ましいものがあった。パラカンの華人社会上流層からもジンティのもとに学びに来るひとびとが続出した。その中のひとりに地区役人の職に就いているテー・ホアイヒンがいた。ホアイヒンもジンティの指導下に高度なクンタオ技術を身に着けて拳豪のひとりになった。

１９０５年半ばごろ、オランダ東インド植民地軍がパラカン郊外の原野で陸上演習を行なうためにやってきて露営した。パラカンの町中でも兵士が右往左往するようになった。その時代、兵士には賭博が公認されていて、兵士同士はもとより一般人を相手にして賭博を行なうことすら許されていた。兵士が行なう賭博のほとんどがサイコロ博打だった。東インド植民地軍兵士というのはマジョリティがプリブミで構成されていることを忘れてはならない。[続く]

「クンタオ（２９）」（２０２４年０１月０４日）

露営している兵士に自由時間が与えられると、かれらはパラカンの町中に来て道路脇に賭場を張った。道路脇に白い布を敷いて、その上でサイコロ博打が行われる。胴元になりたい兵士もたくさんいるから、一枚の布の上に三つも四つも賭場ができ、異なる種類のサイコロ博打が並んで、博打好きには便利な様相が展開される。

ある日、プチナンのど真ん中で中華寺院に向かう大通りの両脇に兵士の賭場が数珠つなぎになった。レッナンチナや地区役人の邸宅の門前であってもおかまいなしに賭場にされ、家人は門前の人ごみを潜って出入りしなければならない。賭博好きの華人やプリブミ、人間が集まっているのを見に行くことの好きな華人やプリブミが老若男女の別なく集まって来て大通りは人間で満たされた。

妻と幼い娘を連れて街中を散歩していた政庁監視官のハルトマンがプチナンの大通りまで来てその様子を目の当たりにし、立腹した。路上を往来することが不可能になっているのだ。その原因は通りの両脇を埋めている兵士たちの賭場だ。監視官は兵士たちに賭博をやめろと言った。賭博がいけないのではなくて、大通りがこんな状態になっている原因がお前たちにあるのだと説明したが、それは路上をいっぱいにしている住民に責任があるのであってわれわれは悪くないと兵士たちは反論する。

ハルトマンの一家三人には従卒がひとり付いているだけであり、大通りで賭博開帳している兵士は何十人もいる。しかし監視官は行政の権威を示さなければならないと思った。自分の傍で口から泡を飛ばしながら反論して来る兵士の頬を張り、すぐにこの場を片付けて露営場に戻れと怒鳴った。ところがプリブミ兵士たちはオランダ人行政官に恐れ入り畏まろうとしないで、監視官に反抗し始めたのだ。監視官の一家を身体で押し返そうとしたから、小さい娘が跳ね飛ばされて側溝に落ちた。従卒は即座にお嬢ちゃんを抱え上げると監視官の妻の手を引いてすぐ傍のレッナンチナの邸宅の表門から中に逃れた。

地区役人テー・ホアイヒンの邸宅もその大通りに面していた。大通りの少し向こうの方で騒ぎが始まった気配を感じたホアイヒンが外に出て見ると、監視官閣下がひとりで兵士たちに包囲されているのが見えたか

ら、かれは現場に向かった走った。そして兵士たちに押されて少しずつ後退している監視官の横に入って数人の兵士を押し返した。さすがに白人高官に手を出すことを控えていた兵士たちも、チナ人が割り込んで来たので腹立ちをそっちに向けた。こいつをベコベコにしてやろう。

それが地区役人であることも知らぬまま、兵士たちは拳をその華人に振るった。ところが兵士の拳はすべてはたかれてひとつも華人の身体に打撃を与えることができず、反対に突き飛ばされて数人の兵士が地べたに転んだ。兵士たちは一歩ひいた。そのすきに監視官は現場を逃れた。

地区役人と30人くらいの兵士の格闘が路上で始まったのだ。それまでは監視官と兵士の押し合いをすぐ脇で見物していた住民たちもとばっちりを恐れて脇から離れ、距離を取って遠巻きにした。そこでまた群衆の間に押し合いが起こり、女子供は周辺の邸宅の門から中に逃げ込んだ。急いで邸宅の門に閂をかけた家もあれば、群衆が逃げ込んでくるのに任せて何もしなかった家もある。

兵士たちは人数をたのんでたったひとりのホアイヒンを撃ち倒そうとしたのだが、巧みに攻撃をかわして逆襲し、兵士たちを路上に転がすクンタオの達人にひとつの打撃すら与えることができない。そうやっておよそ20分が経過したころ、軍の高級将校がひとり騒動の現場に馬でやって来た。それを見た兵士たちはクモの子を散らすように現場から姿を消した。しばらく後にこの騒動の取調べが軍内部で行われ、軍法会議で数人の兵士に罰が下されたそうだ。

後日、スマランの新聞 Warna-Warni がパラカンの事件を詳報し、地区役人テー・ホアイヒンの活躍を絶賛した上、高名なクンタオ師ロウ・ジンティから優れた技術を学んだ成果がそれだったとジンティの名前までほめそやした。[続く]

「クンタオ（30）」（2024年01月05日）

ジンティはパラカンにウォノソボで得た妻を伴って移り住んだものの、妻はパラカンで世を去った。パラカンの友人たちがまたジンティに妻を持つように勧めた。自分は高齢になったからもう家庭の執事はいらない

と断ったものの、高齢だからこそ自分の身を見守ってくれる家族が必要なのだと説得され、プリブミの女を妻にした。ところが数年後にこの妻が不倫を犯したためにジンティは離縁した。そのあと、マグランに住む後家の華人女性を妻に娶ったものの、この妻は数年後に記憶喪失になってしまい、病院住まいをさせなければならなくなった。

ジンティ自身も中部ジャワ州トゥマングン県パラカンを終の棲家にしたのである。かれは子孫を残さず、家族もなく、友人たちに囲まれて1921年に世を去った。

パラカンに移ったジンティは最初、市内ガンブロッ地区の商人アン・チェンの家で厄介になり、後になってホー・ティアンビーの世話を受けることになった。

市内のドゥマガン通り16番地にある総面積2千平米の敷地に建てられた、中華様式を顕著に示しているホー・ティアンビーの邸宅はオランダ人F. H. スタウトから300フローリンで購入したものだった。そのオランダ人は1900年代初めごろにパラカン～スチャン鉄道線路敷設工事が行われたとき、工事監督人としてパラカンに住んだ人物であり、スタウトは自分の居所としてその家を持ち主のマス クルトスミトから450フローリンで買い取った。マス クルトスミトはその家を1894年12月5日に村役人から購入したそうだ。

ティアンビーはジンティのために自分の敷地内にパヴィリウン（離れ屋）を建てた。パヴィリウンは1919年1月19日に完成した。ジンティはそこで拳道武館を催し、パラカンのひとびとにクンタオを教え、ティアンビーの息子ホー・ティッチャイも愛弟子のひとりになった。クンタオ学習の場の外でもそのティッチャイが老齢の師匠の世話を誠意を尽くして行った。ジンティもティッチャイを愛し、この弟子を自分の子供として扱った。ジンティが生涯を閉じたのはそのパヴィリウンであり、ホー家のひとびとがその末期を看取ったのである。

地元のひとびとに Omah Tjandie Gotong Rojong と呼ばれた母屋にはホーの一家が住んでいたが、1990年代にホー一家がジャカルタに引っ越したときに親族がそこを買い取って博物館にした。

博物館の名称はパラカン中華プラナカン博物館 Museum Peranakan Tionghoa Parakan となっていて、ジンティの名前は使われていない。つまり設立者はジンティをテーマにした博物館を作るのでなく、ジンティを

パラカン華人のひとりと捉える視点でその博物館を作ったと解釈できる。この博物館の中には拳豪ジンティの残した中国様式の武器・ジンティの写真・その他の道具類なども展示されており、ロウ・ジンティという人物の紹介が大きいウエイトを占めている。

ジンティの教えたクンタオはホー・ティッチャイを通して後世に伝えられた。全ジャワ島のイルムシラッ界に Garuda Emas dari Siauw Liem Pay という名で知られたジンティの拳道は Perguruan Kungfu Garuda Mas という流派名称で今日も続いている。

ロウ・ジンティから少し下の世代にやはり福建人のロー・バンテンがいる。後に「爪哇五祖拳之父」と謳われるようになったバンテンがスマランに住むようになった事情はジンティとまるで異なるものだったが、かれもジャワ島で名をあげた末に、終にジャワ島で生涯を終えた。この拳豪の生涯をたどってみることにしよう。
[続く]

「クンタオ（31）」（2024年01月08日）

Lo Ban Teng 盧萬定は福建省章州龍海石碼鎮で1886年に酒屋の息子として生まれた。娘がふたり生まれたあとにやっと授かった男児だった。

両親は福建省の他の町の人間で、龍海石碼鎮に移り住んで商売を始めたのだが、その当時はよそ者排斥の気分が強い時代であり、よそ者の店は近隣一帯の目の敵にされてさまざまな嫌がらせを受けた。父親は腰の低い穏やかな人間だったが、それでも嫌がらせは絶えることがなく、あるときは暴漢が店の中に殴りこんできて酒の甕を割りまくるようなことまでされた。それでも父親はため息をつくだけでされるがままになっていた。そんな父親の分まで息子のバンテンが腹を立てた。

息子のバンテンにも嫌がらせの矛先が向けられた。近隣の悪童たちがちょっかいを出してバンテンを怒ら

せ、かかってきたところを大勢で叩きのめすのだ。バンテンに味方する仲間はひとりもおらず、かれはいつも集団を相手にたったひとりで喧嘩した。

バンテンは身体が大きくて運動神経が発達していたそうで、しかもあまり親の言う事を聞かず、怒りっぽい性格をしていた。小さいころからよく悪さをし、親を呆れさせていたという話もある。それでも一人対集団の喧嘩では勝てるはずがなく、喧嘩をしては最終的に自宅に逃げ帰っていた。集団のリンチを受けたあとは、敵がひとりでいる時に喧嘩を吹っかけて復讐戦を行った。一対一の喧嘩であれば、相手が年上の子供でも喧嘩に負けたことがなかった。

１４歳になったバンテンは喧嘩の能力を高めるためにクンタオを学ぼうと考えて、その技術に関心を持ち始め、その町のクンタオの師に付いて二年間学んだ。それだけやればもう大丈夫だと思って道場を去ったものの、いざ一人対集団の喧嘩を再開したらボコボコにやっつけられた。

まだ修行が足りなかったと確信したバンテンは、もっと優れた師を探した。しかし父親はそんな息子の行く末に不安を抱いた。たとえ喧嘩に強い人間になれたとしても、喧嘩が強いだけの人間の一生が意味あるものになるわけがあるまい。まともな生涯を送れるとは思えないのだ。だがこの町に暮らしているかぎり息子はそんな方向に突き進んで行くだろう。父親はジャワ島のスマランに移住した妻の兄弟のひとりに息子を預けることにした。１７歳のバンテンはジャワ島に向かって旅立った。

ところがいざスマランに来てみると、叔父の一家はバンテンを役立たずの余計者のように扱った。傷心のバンテンはそこで7ヵ月間暮らしただけで、また故郷に帰ってきた。そして実家の酒屋商売を手伝うようになる。しかしクンタオへの熱望は絶えたことがなく、店にやって来る客とクンタオの技の話ばかりするようになった。

１９歳になったとき、両親は故郷の町から嫁をもらってバンテンに娶せた。バンテンの妻になったリー・ホンランは娘を産んだ。娘はロー・リーホアと名付けられた。リーホアは成長してからクンタオの達人になり、拳の打撃力の強さは自分の弟子たちの中でピカーだと父親を感心させた。

23歳のときに両親が相次いで亡くなったため、バンテンは家業を継いで酒屋の主人になった。バンテンに男児が生まれないために、かれは養子を取ってロー・シアウエンと名付け、血統を絶やさないための備えをした。だがクンタオを学ぶ意欲は少しも衰えない。

ある日、来店客の相手をしてクンタオの話題を語り合っている中で、客が語った言葉にバンテンは興味を引かれた。クンタオに強くなるためには高跳びの技を身に着けなきゃいけない。クンタオの達人は地面から屋根の上まで跳び上がることができる。

「へえ、それはどんな練習をするんですか？」

「石で作った木屐を履いて跳び上がる練習をする。最初は軽い木屐を使い、段々と重いものに変えて行く。その技を修得すれば、地面から屋根まで跳び上がるのにもう石の木屐は使わなくてよい。」

［ 続く ］

「クンタオ（32）」（2024年01月09日）

さっそくバンテンはその練習をするために石の木屐を注文することにし、家の近くに住んでいる墓碑職人を訪れた。5キロくらいの重さの石の木屐を作ってくれという注文に老齢の職人は驚いた。初老でやせた体躯のその職人はバンテンを頭の先から足の先まで眺め渡し、何のためにそんな物を注文するのかと尋ねた。

余計な詮索をしやがると思ったバンテンはご機嫌斜めになり、「高跳びの技を練習するためだ。」と吐き捨てるように言った。すると墓碑職人はゲラゲラと笑い出したのである。

「なんという愚かなことを・・・。あの連中を見てごらん。かれらが重荷を下に置いたら、天まで飛んでいけると思っているのか？ハハハハ。」墓碑職人は表を通りかかった数人の肥え桶担ぎを指差してそう言う。

怒りが頭に上ったバンテンはその年寄りに勝負を挑んだが墓碑職人は相手にせず、「付いて来い。」と言って家の奥に入った。家の中には人のいる様子がまったく見当たらず、その年寄りが孤独な一人暮らしをしていることをバンテンは知った。

年寄りは寝台の下から大きい錠前の形をした石の造形物を取り出してバンテンに渡した。

「ははあ、こいつはオレの力試しをしたいんだな。」

バンテンはにんまり笑うと、その25キロくらい重さのある石を片手で上げたり下げたり振り回したりして見せた。褒め言葉が返って来ると思ったのに反して、年寄りは見下した調子を続ける。「なんだ、そりゃあ。そんな練習をいくらしたところで、死んだ力の使い方でしかないぞ。」

バンテンが何かを言うより先に、年寄りはその石をバンテンの手から取って片手で上に放り上げ、回転しながら下りて来る石を別の片手で受けた。指は石の形に添ってしっかりとそれを握りしめ、腕の震えもまったく見られない。バンテンは目を見張った。

このやせた身体の年寄りがたいへんな力と技を持っていることを目の当たりにしたバンテンは、自分の目の前にいるのがクンタオの達人であることを即座に理解した。かれは身を低くして自分を弟子にしてくれと頼んだが、年寄りはけんもほろろに断った。

バンテンの心にその墓碑職人のことがわだかまった。このクンタオの達人はいったい誰なんだろうか？店の客や知り合いに尋ね回った結果、その年寄りの正体が判明した。Siauw Lim Ho Yang Pai 少林河陽派のひとつで泉州に興った Ngo cho Kun 五祖拳の開祖である Tjoa Giok Beng 蔡玉明宗師の直弟子で、五高弟のひとり Yoe Tjoen Gan 尤俊岸がその人物だったのである。

それを知ったバンテンの心は決まった。ユー・チュンガン師匠の他に自分がクンタオを学べる人物はいない。バンテンは折に触れて墓碑職人の家を訪れて弟子入りを願い出たが、頑固な年寄りはいつも首を横に振った。

そうしているうちに一年が過ぎ、ユーの商売が行き詰まってしまった。収入がなくなって家賃すら払えなく

なったため、家主がユーに家の明け渡しを宣告した。バンテンにとってはそれが好機になった。自分の家に引っ越すようバンテンはユーを説得した。自分に惚れ込んだ若者に苦笑しながら、ユーはついに折れてバンテンの家に引っ越した。この恩返しのために、クンタオをお前に教えようと言って。

ユー師匠を家に引き取ったバンテンは家の中の一番良い部屋を師匠に与え、専従の下男を付けてあらゆる雑用をさせた。そして自分もその時代の親孝行息子が父親に示すお手本を実践して師匠に礼を尽くした。

ところがこの家の主人がクンタオの話を聞き指導を受けるために師匠の部屋に入り浸るようになったために、店の商売がほったらかしになり妻子への関心も消え失せたように見えた。その結果、店の商売の采配が番頭任せになってもたいして波風は立たなかったが、夫の心が失われた妻子のほうはそうもいかなかった。[続く]

「クンタオ（33）」（2024年01月10日）

何の取り得もないやせた年寄りに夫が居所を与え、飯を食わせ、下男を雇ってやり、それだけならまだしも店の商売をほっぽり出して金儲けすら怠り、おまけに大切な妻子への愛情すら忘れ去ったと妻は感じたのだ。夫の家族に愛想のかけらも示さず、夫の心を狂わせてしまった年寄りに対して妻が憎しみを抱いたのも無理はあるまい。

ユー・チュンガンを悪しざまに言い、目を覚ませと夫を非難する妻との喧嘩の日々がバンテンの暮らしを彩るようになった。そして夫婦喧嘩は行き着くところまで行き、離婚を互いに叫び合う日がやってきた。親戚一同がそれを放置すればこの家庭は崩壊しただろうが、バンテンの叔父伯母がそうはさせなかった。夫婦が離婚を実行に移そうとする前に叔父夫婦がやってきてふたりに意見したのである。危機は回避された。ただしそれは仲直りなどという甘いものでは決してなく、その時代の価値観をそのまま反映する女の忍耐と服

従という形態の実践でしかなかったのだが、ともかくこの家庭の空中分解は辛うじて防がれたのである。

ユー師匠からクンタオの教えを自分ひとりが受けるのはもったいないとバンテンは考えて、一緒に教えを受けようと友人知人を誘った。そのために家を借りて道場に作り直し、そこを武館にした。そして弟子になった者たちから謝礼を取り、自分の金をそこに加えて師匠の収入にした。

ところが武館でユーはバンテンをインストラクターにし、自分は何もせずにただ座って練習を見ているだけだった。ユーはバンテンにだけクンタオの技を丁寧に教え、バンテンがそれを武館で仲間たちに教えるという形が取られたのである。自分が学んだことを他人に教えるというプロセスが学習結果の消化を完璧なものにするという鉄則がそこで実践されたのだったが、武館に集まるバンテンと仲間たちがそこまで理解したかどうか。

バンテンの仲間たちには、バンテンが大師匠とあがめているやせた年寄りが本当にクンタオの達人であるとは思えなかった。それはバンテンの妻が犯した失策と似たようなものだった。バンテンの妻も、こんなやせて力のなさそうな年寄りはクンタオのかけらも知らない女のわたしが押しただけでひっくり返ってのびてしまうだろうと思ったのだ。

ある時、武館での練習時間にバンテンが遅刻した。集まった弟子たちはユーに、師範代が来ないからぜひ師範ご自身から教えを受けたいと願い出た。ユーにはもちろん、弟子たちの真意がどこにあるのかが判っていた。

ユーは立ち上がると弟子の中から身体が大きくて力の強そうな者を4人並ばせて、腕を打ち合わせる技を行なった。お互いに自分の腕を相手の腕に打ち当てる技だ。ユーと腕を打ち合わせた4人の中のだれひとりとして、2打目を試そうとする者がいなかった。最初の一打だけでだれもが、腕が打ち合わさるときにユーが加えた瞬発力の凄さを思い知ったからだ。硬い木の棒で腕を叩かれたような痛みを感じたとかれらは後で語った。それ以来、ユー・チュンガンの名前が巷でささやかれるようになった。

バンテンは酒屋商売のために時々厦門や泉州に旅をした。あるときユーが厦門に住んでいる兄弟弟子の Goei Un Lam 魏隠南に紹介状を書いてくれた。「アモイに行ったときに会って来い」と言う。言われた通りバンテンは Hoan Thian Pa 翻天豹のあだ名を持つグイの家を訪れて、ユー師匠の話をいろいろとした。グイ師はバンテンのユーに対する尊敬と奉仕に感銘を受けたようだった。弟子を取らないユーが珍しく持ったこの若者に興味を抱いたグイ師はバンテンにクンタオの動きを示させた。それを見たグイ師の顔が曇ったのを、バンテンは見逃さなかった。だがグイ師はそのことに関してバンテンに何も言わず、「一度アモイに遊びに来るようにユーに伝えてくれ」という伝言をバンテンに与えただけで、バンテンは歓待されてその家を辞した。

自宅に戻ったバンテンがグイ師との会見の様子をユー師匠に語り、最後に伝言を伝えたとき、ユーの顔色が変わった。その数日後にユーは厦門に旅立った。[続く]

「クンタオ（34）」（2024年01月11日）

そしてユーは厦門にほんの数日いただけでほどなくバンテンの家に戻って来ると、バンテンに五祖拳の奥義を手ほどきし始めたのである。ユーは兄弟弟子のグイに意見されたのだ。

「あれほどお前を師匠とあがめて誠心誠意尽くしている弟子に何を教えているのか？弟子を自分より優れた人間に作り上げようとしない師であるなら、その教授と指導は決してホンモノにならず利己的なもので終わってしまう。そんなことをするのはシャオリムホーヤンパイの名を汚しているのも同然だ。」

確かにユーはバンテンに五祖拳の奥義を伝えようとは考えていなかった。通りいっぺんのクンタオの基礎を教えて訓練してやればそれで済むことと思っていたようだ。酒屋の若主人を五祖拳流派の高弟にするという考えがユーにとっては常識的でなかったということなのだろう。

相手を撃って打撃を与える効果的な方法、撃つときにその部位に力を集中させるための身体の動き、敵への打撃効果を高めるための手と足の連係動作、敵の攻撃を受け流すのに最適な身体の動き・・・・。

それらを学び始めてから、バンテンの目からウロコが落ちた。かれの頭脳にクンタオの本質に関する悟りが開かれ、かれの身体がその悟りを具体化するために動くようになった。およそ3カ月後、ユーはバンテンに力試しをしてもよいと許可した。バンテンは昔のリンチグループに対決を挑んだ。

「誰でもよいからオレにかかって来い。みんな一緒でもいいぞ。」

昔から一対一だと勝てない相手だったから、当然集団でかかってきた。ところがひとりもバンテンの身体に打撃を与えることができず、バンテンの身体に触れる前に自分が飛ばされて地面に転がった。五祖拳の奥義がバンテンの身に着いたことが証明されたのである。故郷の町でロー・バンテンの名前が不動のものになった。

バンテンが27歳のときにユー・チュンガン師匠が没した。息を引き取る前に師匠はいつも身に着けていたベルトをバンテンに与え、「お前は十分な腕になった。これからは自分で工夫してさらに自分を磨くように。このベルトには手帳がふたつ挟まれている。ひとつはワシが考えたクンタオのいろいろなヒント、もうひとつは身体の怪我や打撲の治療方法の覚えを書いたものだ。ワシがお前に残せるものはこれしかない。お前のこれからの生き方の足しにしてくれ。」と語って果てたのである。バンテンは実の父親が亡くなったときに劣らないほどたくさんの涙を流した。バンテンは家族を持ったことがない師匠の喪に服し、自分に男児が生まれたらそのひとりにユー姓を与えて師匠の血統を継がせるとまで誓いを立てた。

厦門のグイ師の知己を得たバンテンをグイ師が他の兄弟弟子たちに紹介してくれた。厦門の Ong Tjian Pwee 翁朝言や泉州の Liem Kioe Djie 林九如などの著名な拳道師たちがみんなで兄弟弟子のユー・チュンガンを愛したバンテンを可愛がった。バンテンの酒屋商売は倒産して店がなくなっていたから、かれは身軽にそれらの師匠たちと親交を深めてクンタオの道を掘り下げて行った。

それと同時に、クンタオに必ず付いて回る打撲や捻挫・骨折などの武闘医術についても、ユー師匠が残した手帳に加えてリム師の骨筋の故障や内出血の治療方法に関する詳しい知識、オン師が得意な脈拍の読み方から内科や老人・女性・子供の病気の治療方法などもあわせて習得し、医者の仕事もするようになったので、かつて父親が心配した喧嘩ひと筋の世間のあぶれ者になるようなことは起こらなかった。医者として

の名声も高まって、たくさんの病人やけが人がバンテンの診療所にやってきた。[続く]

「クンタオ（35）」（2024年01月12日）

それ以来十数年間が経過して、バンテンが示した数々の武勇伝が喧伝された。福建省南部地方で敵なしと言われ、大勢の弟子を持つに至った。中でもシャオリムホーヤンパイの名前を見下して蔑む者たちに怒りの鉄拳が飛ぶことが多かった。かれの町にやってきた膏薬売りの行商人が「自分はグイ・ウンラムを倒した」と嘘の自慢をしているのを耳にしてさんざんにやっつけた話もある。

1927年、バンテンが41歳のとき、かれはふたたびジャワ島のスマランに向かった。スマランに住んでいるヨー・キアンティンという面識のない人物からの手紙に動かされたのだ。ヨーからの手紙には、ジャワ島で格闘試合の興行が行われていて、米国の黒人ボクサーが中国拳法を馬鹿にする発言をしているので、真の中国拳法をジャワ島のひとびとに示してほしい、という内容が書かれていた。

バンテンはスマランに行こうと思った。昔、自分を役立たずの余計者扱いした叔父の一家に功成り名遂げた今の自分を見てもらいたい希望が心中に湧いた。恨みや憎しみを相手にぶつけて見返し、復讐しようという心理でなく、自分を見直してもらって親戚のつながりを深めたいという気持ちだった。

その時期、中国で最初のバンテンの弟子になった甥の Lo Boen Lioe はチルボンに移住していて、演武館道場を開き拳士としての名前もスマランにまで聞こえていた。

また別の甥のひとりでバンテンからクンタオの手ほどきを受けた Lim Tjoei Kang 林水港もシンガポールに住んでいた。バンテンはシンガポールに住んでいる師叔のひとり Sim Yang Tek にチュイカンの身を託していたのだが、自分がスマランでしばらく暮らす間チュイカンを連れにしようと考えたのだ。そのために、ジャワを訪れる前にバンテンはシンガポールに行ってシム師にチュイカンをしばらく貸してほしいと頼んだ。スマラン

で家族のいない孤独の身になるのだから、親族がいるほうが心強いし、またチュイカンにクンタオを指導することで時間をもてあますこともなくなるだろう。シム師は最初難色を示したが、親族の頼みを拒否するわけにもいかず、チュイカンをバンテンに委ねた。

スマランに着いてヨー・キアンティンの邸宅を訪れると、ヨーは大喜びですぐに闘技場を設けて黒人ボクサーとの試合の企画を進めた。ところがオランダ政庁がその試合を禁止したのである。

バンテンは8ヵ月間くらいジャワ島に滞在してから中国に戻る予定にしていたが、ジャワ島の華人社会がかれを放そうとしなかったために、結局かれはスマランに住み着くことになってしまった。家を借りてそこを診療所にし、中国医師としての暮らしを始めたのである。腕のいい医者として、かれの診療所も繁盛した。そして暇を見つけては連れて行ったチュイカンにクンタオを教えた。クンタオを習いたいと言うひとびともたくさんやってきた。

スマランに居を構えてからほどなくして、バンテンはとても気立ての良い娘を見つけた。いつもひとに優しく振舞い、微笑みを絶やしたことがなく、品が良くてけじめをよくわきまえている娘だ。名前をゴー・ビンニオと言う。仲を取り持つひとがあって、ビンニオがバンテンの二人目の妻になった。翌1930年、ビンニオは男児を産んだ。この最初の息子はシャウホンと名付けられ、この子が少年に育ったらクンタオをみっちり仕込んでユー師匠の姓を継がせることをバンテンは計画した。

続く1931年に次男が生まれてシャウゴッと名付けられた。シャウゴッはクンタオと医術の極意を父親から受け継いで、インドネシアでその後継者になった。[続く]

「クンタオ（36）」（2024年01月15日）

その年バンテンはジャワ島の華人社会を大いに沸かせる大興行を打った。緑鼻のバロンサイ公演だ。そこではバロンサイの曲芸だけでなくクンタオの試合も行われ、腕に覚えのある人間は誰でも自由に試合に参加して構わない。バンテンの意図はジャワ島におけるクンタオのマッピングを行なうと同時に、埋もれているかもしれない拳豪を掘り起こすことにあった。

そのクンタオのプログラムにはチルボンのロー・ブンリウとタン・ヒウリオンそして演武館の生徒たちがバンテンとチュイカンを助けて参加した。この催しはスマランとソロおよびヨグヤカルタで開かれた。

ところがバンテンの意図とは裏腹に、その興行を売名行為と見なした同業者たちが反発して一斉に非難の声をあげたのである。自分の真意を理解しようとしないで世間が自分に背を向けたことにバンテンはたいへん落胆した。結局その興行は多額の私費をバンテンの金庫から流出させただけで、かれにとってはほとんど成果のない無駄なできごとになった。

一年くらいしたら戻って来るという話で夫を送り出した最初の妻ホンランはリーホアとシアウエンと三人で夫の帰宅を待っていたが、夫が帰って来ずに手紙が来て、スマランでの状況を知らせてきた。だがそれよりも前に、バンテンがジャワで女のグナグナにかけられて虜にされてしまったというご注進をホンランに届けた者があった。ジャワの女は性悪で、これぞと思った男に魔術をかけ、色仕掛けで男の心を奪い、自分の性の奴隷にするのだと言う。

他にもジャワから帰って来たひとびとが、向こうで有名人になっているロー・バンテン先生の噂話をホンランにいろいろ物語った。「ロー先生はスマランで家庭を持ち、豪邸に住んで贅沢三昧の暮らしをし、外出には自動車を使っているご身分だ。先生が故郷の妻子に仕送りをしようとしても、向こうの妻が徹底的にそれを邪魔して仕送りができないようにしている。」

確かに緑鼻のバロンサイ公演のあと、バンテンの資金が枯渇してホンランへの仕送りが滞る時期があったのも本当だが、ビンニオを悪女にし、ホンランとビンニオを憎み合わせ、成功者の一家に波乱が起こるの

を喜ぶ人間が巷にあふれていたのも本当のことだった。

そういう噂話が故郷で沸き立ち、親族一同が話し合ってジャワの性悪女に引っかかったバンテン先生を正気に戻させるためにホンランをスマランへ行かせることを決めた。リーホアは既に結婚していたから、養子のシアウエンがホンランに付き添って船に乗った。

大金を支出して金回りが最悪になっているばかりか、世間に背を向けられて傷心に陥っているバンテンのところに、故郷にいる妻と養子が様子を見にやってくるという手紙が届いた。バンテンの心は戦々恐々に陥った。家族騒動が起これば、また世間からの白い目と蔑笑を甘んじて受けなければならない。

しかしビンニオは夫の最初の妻がやってくるのは当たり前のことと考えていた。ビンニオは夫の名声と世間からの評価をどうすれば守れるのかということをじっくりと考えた。最初の妻と自分が姉妹になれば、それで問題は何も起こらなくなるだろう。

ホンランとシアウエンが乗った船がバタヴィアのタンジュンプリオッ港に到着したとき、ビンニオが自ら船に上がって来てふたりを迎えたことにホンランは驚かされた。ホンランとシアウエンがスマランのバンテンの家に着くまで、バタヴィアのホテルからスマラン行き汽車の手配、スマラン駅から家までの移動のありとあらゆることをビンニオがすべて片付けた。自分を姉と呼んで大切に遇するビンニオの態度に接して、ホンランのイメージの中にあった性悪女の姿は霧消してしまった。

バンテンの二人の妻は本当の姉妹のようになった。ホンランの帰国予定日が近付いたころ、ホンランはビンニオに提案した。「今度はあなたたちが子供を連れて中国に来てください。ここでとても親切にしてもらったお返しをわたしもしなきゃいけないから。故郷の親族も夫に会いたがっているし。」ビンニオは即座にその招待を受けた。[続く]

「クンタオ（終）」（2024年01月16日）

まだ小さい子供二人を連れてバンテンとビンニオが中国に到着した。そのときバンテンは自宅に戻る前にユー師匠の墓に詣でて、この長男のシャウホンを師の跡継にすると宣誓した。それから自宅に着いて7ヵ月ほど逗留している間、ジャワの性悪女と言われていたビンニオの素顔に接した親族一同は誤解を解いた。

ホンランもスマランで自分が受けたような待遇をビンニオにお返しした。ところが第一妻が年下の第二妻をかいがいしくお世話する様子を見た親族が、やっていることがおかしいとホンランを批判した。第一妻は大奥様というのが中国の常識なのだ。しかしホンランはそれに反論した。「あなたはわたしがスマランでどれほど親切にされたのかを見ていないからそんなことが言えるのよ。姉が仲良しの妹を大事にしてあげても、何もおかしいことはないでしょう？」

スマランに戻る時期が近付いたとき、ホンランはビンニオに自分の希望を打ち明けた。子供のひとりを自分にくれ、と言うのだ。「あなたは若いからこれからもまだ子供を作ることができる。だが自分にそれはもう無理だし、バンテンの実子が自分の老後に関りを持ってくれることのほうが喜ばしい。それにあなたの実子が中国にいることはあなたを中国に来させる理由になるのだから、そこでわたしたちもまた再会できることになる。わたしを本当に仲良しの姉だと思ってくれるのなら、わたしのお願いをかなえてもらえないかしら。考えてみてくださいな。」

ビンニオは答えに窮した。ともかくバンテンと相談することにしてその話は終わった。自分の母がこのふたりの孫をとても可愛がっているのだ。それでもビンニオはホンランの願いをかなえてあげようと思った。だがどちらの子を中国に残すのがよいのだろうか。

赤ちゃんのシャウゴッの方がまだあまり物事を覚えていないから、実の親と別れてもトラウマが軽いのではないかというのがバンテンの意見だった。ビンニオもそれに賛成した。ビンニオの結論にホンランは大喜びになった。ところがシャウゴッを残して出発する準備をしていたとき、この赤ちゃんが激しい下痢に襲われた。出発の当日になっても下痢は収まらない。ホンランは途方に暮れた。この病気をどう治療してやればよ

いのか、わたしには解らない。やはり実の親に診てもらうのが一番いいと思う。シャウホンをわたしに残してもらえないだろうか。

バンテンとビンニオはホンランの頼みを受け入れざるを得なかった。赤ちゃんを抱えて船に乗ったあと、しばらくしてふと気が付くと下痢は止まっていた。バンテンは感心したように語った。

「ハイヤー、ユー師匠の神通力はたいしたものだ。跡継のシャウホンを自分の近くに置きたかったんだろう。」

バンテンとビンニオの間に三人目が生まれたのが１９３４年で、そのあと続々と9人が生まれて男女総勢１２人になった。１９３８年、バンテンの一家はバタヴィアに移った。チルボンのロー・ブンリウがバタヴィアのコンシブサール地区に移っていたので、バンテンの一家もそこに合流したのだ。

ところが日本軍のジャワ島進攻から逃れるために１９４１年にバンテンの一家はソロに移った。ソロとジョクジャはオランダ王国の植民地になったことがない。オランダ植民地政庁の操り人形になっていても、形式上は独立した現地の王国であり、オランダ王国の主権は及ばない土地なのである。ソロで中国医になっていたチュイカンにバンテンの一家は頼ったようだ。

日本軍政時代が終わると、バンテンの一家はまたジャカルタに移った。バンテンはジュラケンで薬屋を開いている。そして１９５８年７月２７日にバンテンはジャカルタで永眠した。享年７２歳。かれの遺体はムアラカランの火葬場で荼毘に付された。そのときの薪の量が半端でなかったという話だ。バンテンの子孫は今もタングランのモデルンランドに住んでいる。[完]